
東方狂戦録

そぼろ井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方狂戦録

【Nコード】

N8291T

【作者名】

そぼろ井

【あらすじ】

家で寝た筈なのに気が付きや森の中。見覚えのある人物を見つけこの場所が、この世界がどこか知った瞬間、青年はdkhrwktkした……。初投稿作品です。文才？食べ物？な作者ですが、どうか生暖かい目で観てやって下さい。東方projectについて十分な知識があるわけではありません。矛盾点も出てくる可能性が大、です。不快感等を感じる方はご遠慮下さい。大丈夫だ、ノンプロブレムという方は、駄作ですけども、観てやって下さい。オリジナルの設定も時々載せるつもりですので、コラボも歓迎します。・・・

さて、それでは開幕です。
く早めに出します。

更新は不定期ですが、なるべ

序章らしいよコレ。(前書き)

どうも、初投稿です。至らない所もありますがどうぞ観て下さい。

なお、原作大崩壊なので、不快感を感じる方はご遠慮下さい。

まもなく開幕です。

序章らしいよコレ。

????? 幻想郷?????

それは、忘れ去られし存在が必然に辿り着く最後の理想郷。

数多の人間が、

数多の魍魎が、

数多の神々が、

数多の悪魔が、

穏やかに住まう安寧の世界。

結界に隔たれし安息の地。

そこに、

とある青年が投げ出された。

此度はこの青年の話しよう。

さて、知らないうちに連れてこられたこの青年は。

一体この世界をどうかき回すのだろう????

「・・・どこやねん？」

青年、神崎京介はわけがわからないでいた。

自分は確か自室で寝ていた筈だ。仕事が珍しく夜明けまで長引いて、疲れたのでそのままベッドに倒れ込んだ筈。しかしどうにも違和感を感じて起きてみると、どこかの森の中にいた。

「・・・見渡せど木々ばつかか。マジでどこ？」

しかし京介は割と冷静でいた。この男、その気になれば瞬時に家に帰れるからである。それがたとえ全く知らない所でも関係ない。とある方法で必ず帰れるのである。

だが今は現状について考えていた。いつでも帰れるというのは後回し。今の問題は、いつ、どうやってこんなところに来たか、である。

「・・・とりあえず持ち物確認しとくか。」

右隣に何故か自分のシオルダーバッグがあった。ポーチもある。仕事から帰ってきた時、バッグを片付けず、ポーチと一緒にそのままベッドの横に投げ出したので、中身はおそらくその時のままだろう。

だが、何故一緒にこんなところにあるのだろう。誰かが運んだとは思えないが、戦闘の心得がある京介は、部屋に誰かが入ったとしたら寝ていてもすぐに反応できる。にもかかわらず気がつけば知らない森。日の高さ気温からして恐らく昼頃だろう。そして荷物（・・・いつだ？オレはいつからこんなところに？運ばれた、にしても必ず体に触れなければ絶対に無理だ。でもそんなんあったらイヤでも気付く。なのにこ丁寧に荷物まで。・・・どうなってんだ？）

いつまで考えても疑問は解消しない。とりあえずもう一回森を見渡してみる事にした。京介の視力は通常の値を軽く超える8・0。南米の先住民族も顔負けの超視力である。ただ、森の中なので、い

くら目が良くても限度はある。かなり深い森のようで、頑張っても2km前後が限界だった。

（それでもまあ・・・充分か・・・あれ？）

左前方の樹に何かが立ってかかっている。

「・・・オレの仕事道具？」

そこには京介の身の丈と同じくらいの大きめの剣が、刃先を下にして立てかけてあった。形からして西洋風のものだ。そしてその刃先辺りに大きめの拳銃が2丁。これらは京介の仕事に必要な武器である。

というのも、京介の世界では「悪魔」や「妖怪」などという人成らざるモノが蔓延っているからである。故に、人が襲われることも多々ある。そのため、人は自衛手段として常に何かしらの武具を持ち歩いている。しかし普通の人間では魑魅魍魎を退治するのは極めて困難であり、主に何かしらの能力や魔力と呼ばれるものを発現できる者が退治に赴く。京介も色々と特殊な力を兼ね備えている1人であり、この力を使って魑魅魍魎退治をしている。

故にここに武器まで一緒にあったのは京介に取って僥倖であろう。

（・・・何が出てくるかわからんな。とりあえず警戒しとくか。）

京介は剣を背負い、拳銃を上着のホルスターにしまい込み、荷物片手に歩く事にした。

歩いても歩いても森。しかしすぐに帰る気にはならなかった。何せ気が付けば見知らぬ森なのだ。この謎を解くまで帰る気にはなれなかった。

「あなたは食べていい人類？」

後ろから声をかけられて京介は振り向いて仰天した。

そこには見た目小学生くらいであろうか、黒っぽい可愛らしいフリルつきの服を着た女の子が立っていた。しかし、京介の仰天の理由はそこではなかった。

「……ルーミア!?」

そう、京介はこの女の子の名前を知っていた。この子は本来、“幻想郷に住んでいる筈”の“妖怪”なのである。このルーミアという妖怪、外見こそ幼い子どもの姿をしているが、その実態はいかにも妖怪らしく、主な捕食対象が人間。つまり、本来は森で出会ったら致命傷とも言える相手なのである。さらにこの妖怪、“闇を操る能力”があり、対象を暗闇で覆うことで逃走経路を塞ぎ、喰らいついて己の糧としてしまう恐ろしい存在なのである。

しかし、京介はそれについて特に驚く事はなかった。京介は“自分の住んでいる世界”で散々化け物を相手にしている。故にルーミアなど恐れるに値しないのである。にもかかわらず京介が驚いたのは、別の理由があつてのことであつた。

「……まさか……」

京介は、ルーミアが実在していることで驚きを隠せなかった。

「ここは・・・幻想郷なのか？」

序章らしいよコレ。(後書き)

初投稿です。これからぬるぬると書いていく予定です。初投稿故に、このサイトの使い方をまだ把握しきってません。勉強中します。

あと、設定とか甘いかもしれませんが、これが私の限界です・・・

orz

とにかく頑張ります。

もしかしたら文章詰め過ぎで読みにくいですかね？

ちなみにタイトルに深い意味は特にありません。完全に適当です。

もしよろしければ質問・アドバイス等お願い致します。m | | m

主人公データその1（前書き）

主人公の設定です。時々こういったものを投稿しようと思います。設定は変更する可能性もありますが、とりあえず今はこんな感じでいきます。

主人公データその1

人物

・神崎京介

デビルハンター。18歳。大学生。日本で悪魔討伐専門の組織に所属している。

放浪癖あり。色んな異世界へ渡る。どうせイケメン。作者はデスマスク。

遠い先祖に悪魔あり。故に京介の家族は悪魔の血が流れている。

魔力、気、霊力を扱える。魔法、戦闘技術は全て我流。

流行に疎い。ガサツ。シスコン。たまに海外から帰ってくる姉に大体虐げられる。

家族構成は中学生の妹一人、20歳の姉一人（22歳の兄が一人蒸発している。詳細は不明）。両親は他界。

装備

魔剣「タイラント」。イメージはDMCのダンテが扱う「リベリオン」に近い。当然背負う。鞘も無いのにどうやって背負っているかは謎。ちなみにリベリオンと同じように呼べば飛んでくる。ちなみに髑髏はついてない。呼び方は指パッチン。まさしくポール牧である。（笑）

双銃「タルウイ&ザリク」。共に黒色の2丁拳銃。イメージはやはり「エボニー&アイボリー」。飾りは特になし。マガジンは「無限弾倉」。いくら射撃してもマガジンが空にならない仕様。予めマガジンに魔術を組み込み、無限に精製するように設定。魔力は使用者から汲み取る。

大鎌「バルバトス」。若干意思を持つ柄2.5m、刃渡り2mの大

鎌。 意思是名前のとおり。 投げて使うこともできるが、使用者の意思に反して中々帰ってこないことがある（敵を切り刻み続けたり）。 故に滅多には使わない。 イメージは「死ヲ刻ム影」的な感じ。

双剣「ネルガル」。 イメージはサバイバルナイフの拡大バージョンで、柄18cm、刃渡り60cm程の柄が黒い双剣。

弓矢も扱うが遠距離攻撃することがあまりないのでそれほど使うことはない。 ちなみに「レラジェ」という弓を扱う。 イメージとしてはアーチャーの扱う黒弓。

魔力の色は基本的にダークレッド（例外あり）。

悪魔の腕 デビルブリンガー

そのまんまDMC4のネロの腕。 ただし左腕な上、黒い。 普段は魔法術式を組み込んだ特殊な包帯を巻いて、周りには“人間の腕だ”と認識させている。 全体の50%が破れると術式が解けてしまう。 そのためかなり丈夫な素材で出来ている。

呪印「黒呪」。 京介だけに宿る最強最悪の黒い力。 発動すると左目の周りに黒い紋章が浮かび上がる。 瞳も人外となる。 カラーは黒と赤。 何故そんな呪いが宿っているかは本人にもわからない。

発動状態は身体能力が格段に上がる。 素の握力の最高値が400kg。 発動状態だと1トン前後になる。 両腕が鎧を着たような状態になるのでかなり目立つ。 イメージとしては「Get Backers」の美堂蛮が使う“悪魔の腕”と、「ARMS」の高槻涼が使う“ARMS”を合わせたような感じ。 指先から肘の辺りまで。 特に手首から肘までは刺々しい。 大きさは通常時（普通の人間の腕）の2倍〜8倍と、ある程度なら大きさを変えられる。 でもやっぱり目立つ。 ちなみにコレで次元の壁を切り裂いたり叩き割ったりする事

が出来る。切り裂いて次元から次元へと移動できる。どこまでも目立つ。ただしこの場合、京介本人と無生物しか移動できない。目立つ目立つ。

余程の特殊な敵等が現れない限りほぼ無敵状態だが、元来より人体に悪影響を及ぼす「呪い」なので、使いすぎると徐々に魂が浸食されて、浸食率が100%になると暴走する（使っていないければ浸食率は徐々に低下していく）。ただし、暴走といっても何が起るかは分からないパルプンテのような感じ。ちなみに1回だけ暴走したことがあるが、その時は両腕の骨が砕け、黒く太い棘が内側から全身を突き破った。その上魔力が、悪魔にとっては酸素と変わらないが、人間であれば数分で死に至らしめてしまう有毒物質“瘴気”に強制変換され全身から吹き出した。幸い組織内で暴走したため、即座に対応できたので大事には至らなかったが、それでも組織内の人間の約3割が瘴気にやられて数日間意識不明になった。もしこれが組織内ではなく町中などだったとしたら、ということを考えて、京介は極力長時間は使わないと誓った。

制御できるのは京介のみ。悪魔の力と魔法術式で無理矢理押さえ込んでいる。

強骨格。生まれつき骨が鋼並みに硬い。黒呪を発動した時だけダイヤモンド級になる。

アーツ（技、魔法、魔導）

炎と雷を生み出し、操る。それぞれ「炎天」「雷天」という能力名になっている。ちなみに雷と弓矢を組み合わせて「電磁光弓」という技ができる。

投影魔法

「Fate/stay night」に登場する能力、投影魔術の強化版。真作と同じ物を複製できる。特に刀剣類はアーチャーと同じように数多くの宝具級のを複製できる。アーチャーの技術を完全に模倣できるため、弓に替えて放つ事もできる。そして投影した刀剣に雷天を加えて「電磁光剣」という技を放つ事ができる。「電磁光剣」も「電磁光弓」も電磁銃^{レールガン}をヒントに作り上げた。

漆黒魔法

黒呪を扱う京介だけの魔法。この魔法は何故か浸食には繋がらない。こと戦闘時や誰かを護る時にかなり使える。

- ・シュヴァルツヴィントホーゼ（黒渦）

腕から黒い渦を放出する。突貫型と拡散型がある。

- ・シュヴァルツヴァントシユロス（黒城壁）

大地に掌を当てて黒い魔力を大地から円形に噴出させ、一種の結界を形成する。自らが結界の中心にいないといけない。故にこの魔法は戦闘による周りへの被害を抑えるためのフィールドとして使われ、同時に無関係の者を寄せ付けないようにする為に使う。このフィールドの範囲は半径20m？程。特訓により現在進行形で範囲が広がりつつある。

- ・シュヴァルツシユラーク（黒撃）

拳に黒い魔力を纏わせ標的に向かって魔力砲を放つ。型はボクサーのストレートのもの。魔力が続く限りどこまでも伸びる。が、あくまでストレートな攻撃なので応用はあまりきかない。

- ・シュヴァルツシャッテン（影法師）

自分の影で分身を作り出す。密度は本体とほぼ同じだが、一体しか形成できない。ダンテのドッペルゲンガーに似ているが、利便性はドッペルゲンガーより高い。

- ・アルトケーニヒトウフ（古王布）

黒い魔力で形成されたマント。ある程度の攻撃はこれを纏う事で無効化できる。ただ、防御として使う事は少なく、このマントを纏う

事で影から影へ移動できる。ただし一度に移動できる距離は50m
?が限度である。これは修業しても成長しない。

- ・シュヴァルツネーゲル（黒爪）

イメージとしては「MELTY BLOOD」に登場する暴走アル
クエイドの「アルトネーゲル」の黒いバージョン。最大飛距離は約
200m?。

剣技

ベースはDMC4のダンテである。

- ・ドライブ

ダンテと同じように、逆手で振り上げた剣から紅い斬撃が地面を切
り碎きながら走る。

- ・ブレイド

逆手で剣を振って飛ばすドライブに対してこちらは本来の持ち方で
水平に振り抜く。飛距離はどちらも20m?程。

- ・ミリオンスタップ

ダンテと同じように剣による超高速の突きの連打を繰り出す。

- ・ステインガー

ダンテと同じように高威力のダッシュ突きを繰り出す。

銃技

こちらもダンテがベースである。

- ・レインストーム

ダンテと同じように空中で高速回転しながら地上の標的に銃弾の雨
を繰り出す。

- ・クイックドロウ

超高速射撃。ダンテより速いが、命中率はダンテより僅かに下。

体術・技術

一部ダンテと同じである。

・ワンインチパンチ

超至近距離からの拳打。

・リアルインパクト

至近距離で放つ高威力のボディブロー、あるいはそれを含めた多段コンボ。

・サイクロプスハンマー

空中で標的を大地へ拳（大体左フルスイング）でたたき落とす技。威力がかなり高く、地面に激突すれば大体クレーターができる。でも要するにただ威力が高いだけの拳打。

・てきとーに蹴り

富士山が木っ端微塵・・・にはならないがかなりの威力。サイクロプスハンマーのおよそ5倍の威力と考えていい。状況にもよるが、大抵は人外じみたヤクザキツク的なもの。

・バインドボイス（大咆哮）

超絶大音量の咆哮。地面に向けて繰り出せばクレーターができる程。拡散型と突貫型がある。方向性もある程度持たせる事ができる。しかし某美食漫画のシマウマさんのように多芸ではないし、精密に操作できるわけでもない。

・エアハイク

ダンテと同じように魔法陣の足場を形成できる。違うのは魔法陣の形成時間を自由に決められる。故に長時間形成したまま立っている。空中戦では重宝する便利な技。

・ウォールハイク

ダンテと同じように壁を走る事が出来る。

・空拳^{くうけん}

拳を前方に突き出す事で衝撃波を飛ばす事が出来る。「硬気弾」は突貫型の空拳。イメージは漫画「God a 銃」の主人公の技、「ガンブレット」。飛距離は現在50m?程で、現在もどんどん伸びているらしい。「震天颯砲」は拡散型の空拳。飛距離は300m?

程、攻撃範囲はかなり広い。どちらとも一瞬以上の溜めが必要。イメージとしてあえて参考にするなら「ネギま！」のキャラ、「ジャック・ラカン」の技「羅漢適当に右パンチ」だが、攻撃範囲はもっと広い。

魔導

黒呪とは関係なく京介自身が編み出したもの。

・魔導砲

高密度の魔力の極太レーザー。掌を標的に向けて放射する。

・魔導弾

高密度の魔力玉を放つ。

・魔導線

魔導砲を細くしたもの。かなりの集中力が必要で、あまり使わないらしい。使い道としては主に標的の切断である。ウォーターカットー的な感じ。

・デスコア

掌に小さな魔力球を発生させ、相手の眼前に意識を向けると相手の眼前に黒い魔力球が出現する。掌に出した魔力球を握りつぶすと相手の眼前に出現させた魔力球が大爆発を起こす。ただし、技が技なので避けられやすいが、単発でしか出せない。ただ、変わりに破壊力が高く、専ら止めに使われる事が多い。

・ダークネスブレード

漆黒の巨大な刃を形成。イメージとしては「スレイヤーズ」のラグナブレード。

・ダークチェイン

漆黒の鎖。相手を捕縛したり、逆に自らを守る結界としても使える。イメージとしては「Fate」の天の鎖エルキドゥの黒いバージョン。

・天駆

その名の通り、大気を蹴る事で空中を走る事が出来る。空を飛ぶ事

が出来ないので対策としてこの技術を会得した。「ネギま！」の虚空瞬動に原理は似ているが、「跳ぶ」か「走る」かの違いがある。

・メガフレア

京介が暇つぶしに某RPGをやって適当に作ってみた火炎系最強スキル。イメージは「ファイナルファンタジー」のメガフレア。ただし最大威力は「うしおとら」の敵キャラ「白面の者」の火炎くらい。文字通り小さい島なら吹き飛ぶ。威力は自由だが、最大威力で放つと魔力が半分以上持って行かれ、体力もかなり減る。

主人公データその1（後書き）

この先どんどん強くなっていきますが、技を増やしたりとかは今の所考えていません。魔力については元々膨大な量を持っています
が、まだまだ増大します。

ちなみに能力的にはスキマにも干渉できるので、ゆかりんにとっては天敵とも言えます。敵対させるつもりはありませんし、ゆかりんはまだ出てきませんけどね。

それと、もしかしたらどこかで妹や姉を出すかもしれませんが。今の所予定はないですが、出したら間違いなく京介は姉に虐められるでしょう。

それでは、また次回お会いしましょう。 m | m

第1話 「出かける時必ずハンカチとか忘れない？」（前書き）

第一話投稿しました。ワードで書いてからコッチに写しているので
すが、写してみると割と少なく見えますね。第3話まで大体組み上
がってきてるので、その次辺りから少し文章を増やそうと思います。

第1話 「出かける時必ずハンカチとか忘れない？」

突然だが、神崎京介は東方projectが好きである。とは言ってもどつぷりのめり込んでるかといえば、そうでもない。同人誌数十冊、ゲーム数種類、週3ペースでのイラストサイト閲覧、動画サイト閲覧、グッズをいくつか。まあ数える程度しかない。それに知らない事も色々ある。全部を把握してるわけではない。でも京介は東方が好きであった。

そして現在の状況。幻想郷。おそらく「魔法の森」と思われる場所です。京介は頭を悩ませていた。

（まずはここが幻想郷だということ。これはほぼ解決だ。なんせ目の前ルーミアがいるんだし、今現在森にいるんだから確定だな。なにげに嬉しいなコレは。）

京介、実は前々から幻想郷に行ってみたかと妄想をしていたのである。もちろんそんなことが叶う筈も無いと分かってはいたものの、想像を抱くくらいは罰は当たらないだろうと考えていた。しかし今まさに幻想郷に自分が存在している。コレを喜ばずにどうしろというのだろう。京介は心が高揚していた。

しかし、一方で別の事を懸念していた。何故自分がこの幻想郷にいるのか。よほどのことが無い限り、あるいは何らかの事故や、幻想郷を形成している結界に障害が生じる以外、“とある人物”が自分をこの幻想郷に落とした事は明白である。だが何故だ？

（オレをこの幻想郷へ落としたのなら必ず何らかの理由がある筈。・暇だったからって理由も挙げられる以上、考える事がバカらしくなりそうだな。）

京介は一旦考えるのをやめて、目の前のルーミアに注目することにした。

「もう一回訊くよ？あなたは食べてもいい人類？」

ルーミアは自分を標的にしているのである。考えている暇などあまりなかったのである。もっとも、実際京介は彼女に対して警戒する意味すらないのだが。

「お前はオレを喰いたいのか？」

「うん、食べたい。食べていいんだよね？こんなところに迷い込んでるんだから、当然食べていいんだよね？」

「・・・すんげえ勝手な理論だな。こっちの主張も聞かないつもりかよ？」

「だって私にとってはもう食べ物だし。行くよ？」

酷いものである。ルーミアがこんなヤツだと言うのは自分が知っている通りである意味ほつとしたが、自分を完全に食糧としてしか考えてないところは改めて思えばイヤな気分である。

と、ルーミアが飛びかかってきた。口を開けて。

「飛びついて噛み付くと？アホか。」

京介はルーミアをギリギリまで引付けて、頭上に跳んだ。ルーミアは見逃すことなく頭上を見上げた瞬間、とんでもない衝撃をその身に受けた。

「ブッ！？」

頭上へと跳んだ京介はルーミアが上を向いた瞬間、右足で彼女の顔を踏み台にしたのだ。これにより京介は高く跳び、樹の枝へ着地した。

「直線的なヤツ程扱いやすいヤツはいねえな。」

地べたに突っ伏したルーミアを視て京介は笑いながら言った。しかしルーミア自身の失敗とはいえ、彼女の癪に障ったようだ。

「・・・妖怪とはいえ女の子の顔を踏み抜くなんて酷いと思わないのか？」

ルーミアは涙目で訴えたが、京介は動じず、

「喰うつもりだったくせに意見すんなクソガキ。」

余裕の表情でルーミアに告げた。

「・・・そうなのか。」

おなじみのセリフが出てきた事に内心嬉しく思う京介。しかし今は遊んでる意味もない。加えて京介はこの森を出る方法を知りたかった。

「まあ、顔を踏んだのは正直悪かった。確かに女の子ではあるんだしな、お前さんは。こっちの配慮が皆無だったな。ところで1つ訊き……」

「誤っても許さないよ！それにあなたは私の食糧なんだから！」
こっちの言葉を遮ってルーミアがこちらへ跳んできた。さすが妖怪というべきか、普通の人間では出せないであろうスピードで向かってきた。

しかし京介もまた“普通の人間”ではなかった。舌を鳴らしつつ京介はなんとルーミアに向かって跳んだのだ。そしてそのまま、ゴォンッ！！

強烈な頭突きが入り、鈍い音が森じゅうに響き渡った。ルーミア、かなり痛かったようで地面に転がりながら頭を抑えている。

「………！？………いったく………あれ？」

涙目になりながらもルーミアは京介の方へ目を向けると、そこには至って何事も無かったかのように京介が腕を両手をズボンのポケットに入れて立っているではないか。

「……いくらなんでも今の痛くないのか？」

「アホか、こんなんでも痛がる意味がわからんわ。」

どうやら京介はノーダメージのようだが、本来の図を考えるならば、妖怪がピンピンしていて、人間が痛がる絵があるはずである。しかし現在、全く逆の図が出来上がっている。ただ、ルーミアが少女体型であるためか、全く違和感のない絵が出来上がっている。仮に第3者が通りかかったら、果たしてどんな反応を示すのか、想像できないのが不思議でならない。従って“まさにカオス”である。

「……喰うのやめる気になった？」

「ならない！こうなったら意地でも食べるのか？」

何で疑問系？と思いつつもルーミアが攻撃してきたので右へ避ける

京介。そこからルーミアが連続で両手の爪で切り裂こうと向かってきた。これを京介、避ける避ける。一発も当たらないことに痺れを切らしたルーミアは脚力を最大に、京介に突撃を仕掛けた。先ほどよりも早いその突貫はしかし、京介の肘鉄で止められる事になった。

「フンッ！」

ゴキンッ！ズドンッ！！

先ほどの頭突きのような鈍い音。京介は左に避けつつルーミアの頭に肘を落とし、地面に叩き付けた。

「フギヤッ！？」

かなりの威力で叩き付けられ、肘鉄のダメージも相まって、ルーミアは気を失ってしまった。

「・・・弱いものいじめにしか思えないのは気のせいかな？」

気のせいではない、おそらく全員がそう思うだろう。

しばらくしてルーミアの意識が戻った。ルーミアは以外にもあっさりと負けを認めた。妖怪としての矜持でもあるのだろうか。それはルーミアにしかわからない。（当たり前）

「森の抜け方？」

やっと訊く事が出来た京介。思えばここまで来るのに大分時間が経

ってしまった。さつきまで明るかった森にオレンジ色の光が射している。既に夕方のようだ。

「気が付いたらここにいたからな。とりあえずは森を抜きたい。どう行ったらいいんだ？」

訊いたはいいものの、京介はこの森がどう入り組んでいるか全く知らない。訊いても分からないと気付きつつも、とりあえず訊く事にしたのだ。

するとルーミア、

「んゝゝゝじゃあ私についてきて。この辺りならしばらく歩けば湖があるから。」

と、なんとも有難く、頼もしい事を言ってくれた。でも、正直この子はいいい子なのかどうか判断がつけづらい。しいて言うなら「食べる」という行動も含めて、純粹、と言った所か。

何にしても京介としては、喉も乾いていたのでちょうどよかった。

「んじゃあ案内頼むわ。」

「了解したのか？」

「だから何で疑問系？」

などとコントじみたことを言いながら2人は湖を目指すのであった。

・・・それはそうとルーミアって可愛いよな？

第1話 「出かける時必ずハンカチとか忘れない？」（後書き）

第1話でしたが、いかがでしたか？

文才などあるわけでも無いのでちゃんと伝わっているのかどうか
不安ですね。

次辺りでなんとか森を抜ける予定です。

にしてもやっぱり文がみつしりしていて読みづらいですね。

これについても第4話から変えていこうと思います。

それでは次回お会いしましょう。 m | m

第2話 「朝起きたらベッドから落ちてる事が多々ある。」 (前書き)

いつも通りの駄文です。つか前話より駄文だなこりゃ。

この話で怖気を感じる方はご遠慮下さい。でもチケット代はお返ししません。

この話で「ヒヤッハー!!」とを感じる方はチケット代が2倍になります。フヘヘ。

さて、まもなく始まります。

第2話 「朝起きたらベッドから落ちてる事が多々ある。」

森を歩きながら京介は、今の状況を改めて整理した。まずここは幻想郷。その理由としてまずは森中に“毛玉”が漂っている事。こんなものは自分の世界には存在しない。某漫画に出てきたケセランパサランとかいうのに似ているが、アレにはまず目と口は無い筈。ならば少なくとも自分の世界の存在ではないということ。同時にそれはここが自分の世界ではない事も示している。そもそもこんなのが自分の世界にいたら当然珍しい存在としてテレビで放送されてもおかしくない。

次に、今現在隣を歩いている女の子の存在が、ここが幻想郷だと言っているようなものであることだ。闇を生み出し操る妖怪、ルーミア。コイツは幻想郷にいる筈の存在である。つまり、ここが幻想郷である事を体现しているようなものである。

この2つで京介は改めてここが幻想郷だと確信した。となればやはり疑問なのは、自分が何故幻想郷にいるかだ。どうやってこの幻想郷に来たかはおよその見当がついている。何せ自室で寝ていたというのに気が付けばこんなところにいるのだ。ならば当然、“あの女”の仕業ではば間違いないだろう。

だがやはり疑問は尽きない。あの女がここへ自分を落としたのなら、何故そんなことをしたのか。幻想郷は忘れられた存在が最後に流れ着く場所。しかし京介は忘れ去られてはいない。否、忘れる事が出来ないくらい、有名な存在である。だというのにこの幻想郷に落とされたなら、何かしら重大な理由がある筈である。京介は実力者である。“暇だから”という理由で落とすには可笑しすぎる。そんな理由なら力を持たない普通の人間でも落とせばいいのではないのか。だが京介は悪魔を退治する者。いくらなんでも暇だからってこんなことをするとは思えない。あの女は腐つてもこの幻想郷を管理する存在。下手に異分子を取り入れるようなことはしない筈であ

る。

となると、おそらくこの幻想郷は何かしらの事件、あるいは“異変”が起きている可能性がある。そして京介がここへ落とされた理由はその異変を解決してもらったため、と考えられる。これでとりあえず辻褄は合う。

ただ、京介以外にも実力者はいる。何故自分なのか？と考えながら歩き続けていた。

「・・・考え事なのか？」

ふとルーミアにそんなことを訊かれた。顔に出ていたのだろうか？
「ああ、まあな。大した事じゃないから気にすんな。」

そうなのか、とルーミアはまた前を向いた。今は特に疑問を告げる必要もないし、そもそもこの疑問をルーミアが応えられる筈もない。本人に訊くしかないだろう。

しばらく歩いていると、ふと視界に何かが入った。どうやら生物のようだが、少なくとも普通の動物などではないようだ。最もシルエットしか確認できないのでなんとも言えない。

「あ、肉だ！お腹空いてたから食べちゃおう！」

ルーミアがそう言うや否やそのシルエットに飛びかかった。闇に特化している恩恵か、シルエットでもルーミアには視認できるようだ。その生物はすぐにルーミアに捕らえられ、ようやくその姿を視ることができた。しかしそれを視て京介は驚愕した。

「・・・何でや。何でコイツこんなところにいんだよ？」

京介が視たそれはなんと、京介が自分の世界で読んでいる漫画、「トリコ」に出てくる生物だった。

その名を“ヘビガエル”。漫画「トリコ」の世界ではこの生物、捕獲レベル1。サイズも小さいので1人でも捕まえられるくらいである。

「んでも何で幻想郷にコイツがいんだ？実物を見れたのは嬉しいけどどうにも怪し過ぎるだろ。そもそもコイツがこんな森にいる事自体腑に落ちねえな。」

ヘビガエルは本来湿地帯に生息している筈。幻想郷では常識にとられてはいけない、なんて言うが、やっぱりおかしい。名前に“カエル”が入ってるくらいだ、体が乾くのはまずいのではないだろうか？

そうこうしているうちにルーミアはヘビガエルを生で平らげてしまった。生で喰えるのが恐ろしい。

（妖怪だから、っていつてももうちつと焼くとか考えろよ・・・つか少し分けてくれてもいいのに。）

などと思いつつも、とりあえずは湖に着いてからだに決め、京介はルーミアの後をについて行った。

●
●
●

side：京介

途中で1回野宿をした。夜に歩いてもルーミアの案内なら迷わないが、流石に気疲れする。故に野宿をした。その際、またヘビガエルを見つけ、ついでに“醤油バッタ”も発見したので捕まえて、それを晩飯にし、一夜を明かした。ルーミアと食べている時、焼いた方が美味であることが分かったルーミアは、次から焼いて食べることに決めたようだ。思い立たなかったのが信じらんねえ・・・。

夜が明けてオレ達は湖に向けて出発したが、実際湖はもう少しで到着することだった。だったら森の中で野宿することもなかったじゃねえか・・・orz。

そして湖に到着した。これが“霧の湖”かと分かってはいても、

かなりのデカさに驚いた。琵琶湖超えてんじゃね？あれ？公式どうだったっけ？

と、なんか湖を“歩いている”のがいた。いや、正確には水面に爪先を付けて羽で飛んでいるようだ。例えるなら湖がスケートリンクか。いや、その前に。

「ありやもしかして凍った傭兵“チルド”か？」

「・・・“氷の妖精チルノ”だよ、お兄さん。」

と、ルーミアが訂正した。やべつ、素で間違えたわ。

「お兄さん、どうする？」

「どうするって？」

「今相手にする？」

ああ、そういうことが。

「・・・いや、相手にはしない。正直メンドイ。」

「言うと思ったけどね。なら今日はチルノちゃんの相手しないでお兄さんの案内優先にするね。」

「・・・その言い方だとアイツと友達って感じだな。いいのか？」

「うん、今日はしょうがないよ。お兄さんまだ幻想郷の地理分からないでしょ？なら分かるまで案内してあげるよ。」

・・・なんていい子なんだろ。涙出そう。

「ありがとな。」

なんて言ってたらなんか向こうからチルノ来たし。メンドイな・・・。

「ルーミアと・・・人間？なんでこんなところにいの？あ、もしかしてアタイと弾幕ごっこしたいんでしょ？ていうかしろ。」

強制かよ。ヒデエ？（バカ）だ。

「いや、メンド「氷符「アイシクルフォール」（Easy）！！」ってコラア！？」

有無を言わずにチルノが氷の弾幕をばらまいてきた。オレはとっさにルーミアを抱えて（お姫様抱っこだぜjk）右へ素早く跳んだ。
「正直相手してらんねえZE！」

なんて言いながらオレはそのまま加速し、湖へ走った。回避があまりにも速かったためか、チルノがオレを見失つてとまどっている。ラッキー・・・なのか？

「まあいいや、ルーミア、“紅魔館”は知ってるよな？」

「知ってるよ。」

「方向はどっちか分かるか？」

「あ、うん。このまま真っ直ぐ飛べば紅魔館に着くよ。」

「そっか。オレは飛べねえからこのまま走って行くぞ。」

「え？走って？ってひゃあっ!？」

ルーミアの返事を聞かずにオレは湖へ向かって爆走した。オレはスピードに関しては誰にもひけをとらないと思ってる。ジャンボ機の最大飛行速度はおよそ800km/h前後。それを楽に超える。それだけのスピードが出るので当然脚力が半端無い。

「・・・え!？」

水面での強い力が当たると反発する。それが“点”ではなく“面”であるのならより反発力は高くなる。つまりオレはとんでもない脚力で水面を蹴る事で反発力を利用し、沈まずに走っているのである。ハハハ、どこの無敵超人だオレはwww。

「さて、このまま紅魔館まで走るぜ！」

湖の上を走っている事に驚くルーミアをよそに、オレは紅魔館へ向かって走った。・・・チルド・・・チルノ今頃何してんだろ。

・・・

「・・・何で湖走ってんのよ！？」
しっかり見ていたチルノであった。

舞台裏1回目

京介「・・・水の上走るとか・・・何処の騎士王さまだアホ。」

作者「でもお前それくらい出来るだろ？」

京介「まあ出来るからやったけどさ・・・他にやりようあんだろ？」

作者「どうでもいい。」

京介「その言葉はもう一人のお前が出そうだからやめろ！」

作者「どこの封印の礎だ俺は。」

京介「・・・まあとりあえずアホな話は置いて、解説やる？」

作者「大した事無いけどな。」

京介「まあな。とりあえず解説開始。」

作者「あいよ。・・・まず京介のことについて。」

京介「オレは自分の世界じゃ悪魔狩りをやってる。実はオレの世界、かの有名なデビルハンターがいる世界だ。」

作者「しかしあの世界、日本のことについては何にも書かれてないので勝手にウチのオリキャラ、神崎京介を入れてみた次第つつう話よ。」

京介「ただ色々弄くつてたらアイツより断然強くなっちゃったんで、まあ・・・要するにオリキャラ最強の話だな。」

作者「まあな。一応本文に入る前に多分注意書きを書くかもしれないが、オリキャラ最強モノとか版權キャラ乱入、原作崩壊に抵抗のある方は戻った方がいいだろうな。つか二次創作モノなんだし、そこらへんは他の作品を含め理解してくれ。」

京介「ここで書くべきことでもないがな。ここまでの時点で2話なんだから。」

作者「だから本文に入る前に書く予定だったの。」

京介「ならいいけどな。さて、オレの戦闘技術とか能力についてだ

が・・・」

作者「コレは近いうちに書こうと思う。一応構成はできてるから。」

京介「まてゐ！いつ書いたそんなの！？」

作者「ちよつと前に30分で考えた。大分前から構想してたヤツをまとめたただけだな。」

京介「あ、なるほど。元があるからすぐ造れたのか。」

作者「そういうこと。ちなみに大分前つてのは大体5年くらい前で
す。」

京介「古っ！？」

作者「お前自身を考え始めたのはもつとさかのぼるけどな。」

京介「いつ？」

作者「およ十年前。」

京介「古すぎだろ！？つかここまで書いたらお前今の年齢バレルんじゃないね？」

作者「いいよ別に。つか“オレは常に18歳！”的なノリで書いてるから。」

京介「昭和のアイドルかお前は。」

作者「いいツツコミありがとう。さて、そろそろ長いな。そういえば武器のデザインはあんまり考えてないな。」

京介「こないだ剣はあの魔剣に似せるって言ったよな？」

作者「まあな。他にも似せる予定のはあるがな。もちろんオリジナ
ルもあるが、大抵はどつかからひっぱって弄くつたもんだけどな。」

京介「お前文才ないんだしそれでいいんじゃない？」

作者「所詮オレは“文才つて食べ物ですか？”的な人間だからな。」

京介「いやそこまで自分を卑下せんでも・・・。」

作者「いいの、オレなんだから。」

京介「意味わからんわ。」

作者「さて、もう長えよ。もう終わりにしようぜ。これ以上伸ばすと本編より長くなる。解説なんて結局してねえけど。」

京介「だな。ということで次回またお会いしましょう。」 m（――

「m」
作者「それでは、またのご来場をお待ちしております。」m「」

京介「ところでよ。」

作者「あん？」

京介「二次小説投稿するサイトなんだからあんな注意書き不要じゃね？」

作者「必要だよバカヤロウ。」

第2話 「朝起きたらベッドから落ちてる事が多々ある。」 (後書き)

チルノとはもう一回接触させる予定です。

Eazyを避けたのはとっさのことだからです。いくらなんでもいきなり撃たれたら誰でも避けるんじゃないかと。

ルーミアともいつか遊ぶ事になるのでそのとき多分「〴〵程度の能力」を扱うと思います。

そういえば京介の設定も出しちゃいましたね。まあ早かろうが遅かろうがあまり物語に影響はないんで、気にしないで下さい。

「醤油バツタ」は背中に醤油の入った袋を持つ割と大きなバツタです。

「ヘビガエル」は蛇とカエルの融合した生物でいいのかな？とにかくそんな感じです。どちらも「トリコ」に出ています。

それでは次回また会いましょう。m | m

第3話 「カッコいいと思ってた服がエライ勢いで色が薄くなってきた件とかは

正直この第3話、30分で書いたので、色々おかしな点があるかもしれない。

第3話 「カッコいいと思ってた服がエライ勢いで色が薄くなってきた件とかは

「この先まっすぐ行くと紅魔館だよ！」

ルーミアの指差す先にはまだ小さくしか見えないが、建物らしきものがある。ただ、本当に建物なのかどうか疑うくらいに、「紅^{あか}」である。

「アレが紅魔館・・・何考えてあんな紅いの建てたんだ？気色悪いぞ？」

この言葉を住人が聞いていたとしたらどんな反応を示すかは不明だが、誰が見ても真っ赤つか過ぎる建物である。正直視力に問題が起きそうなくらい強烈なのだ。

「吸血鬼・・・か。さて、強いのかね？」

水面を爆走しながら呟く京介。色々考えながら走って、ようやく岸に着いた。

「・・・水面を走るのも凄いいけど、この短時間で湖を渡りきるのもすごいね。」

ルーミアが軽く驚嘆している。実は京介、チルノのいた場所から対岸までの爆走時間は15分程度しかかかっていない。湖は相当広い妖精達が対岸まで飛びきるのにはおよそ1時間半はかかるだろうその距離を京介は余裕の表情で15分程で着いてしまった。

ちなみに、走る速度は最高1000kmだが、まだ最高速は出していない。

岸に着いて京介はルーミアを降ろし、紅魔館まで歩く事にした。ルーミアはそのまま付いてくるようである。案内役をかって出たのだから当然であろう。

歩いて7分といったところか、いよいよ紅魔館の門まで来た。

（ホントに紅いな。屋根から白いペンキでも流し込んでやりたいぜ。）

何気に命知らずなイタズラを考えながら門の前まで来て、ふと気付

いた。

「・・・なんか寝てるし。」

門の横でチャイナ服を着た紅い髪の女性が寝ていた。ただし、“立ったまま”寝ている。

「美鈴はいつもこんな感じだよ。」

ルーミアが唐突に答える。なるほど、と京介は頷く。

「コイツが“紅美鈴”か。・・・マジで立ったまま寝るとかそんな電車だけにしろよ。」

しかもこれが日常茶飯事だという。門番である筈なのにそれを果たして全うしているのだろうか？

「・・・確かめてみるか。」

おもむろに京介はバッグをゴソゴソと漁った。取り出したの是一本のペンである。

普通に歩きながらも足音を一切立てずに美鈴の前に来た京介は、なるべく強い刺激を与えないように優しく美鈴の額にペンを走らせた。

「・・・プツｗｗｗｗｗｗ！！」

ルーミアが突然吹き出した。しかし

「プツｗｗｗｗ！！？」

「あ？」

何故か別の声が聞こえ、右斜め後方へ振り向くと、1人の女性がいる。よく見ればメイドの格好をしている。そして腹を抑えて且つ笑いを何とか堪えようとしている。しかし吹いている。かなりツボにはまったようである。

「ｗｗｗｗｗｗ額ｗｗｗｗｗｗそｗｗ粗大ｗｗｗｗｗｗ」

美鈴の額にはかなり丁寧な字で「粗大」と書いてある。京介は、恐らく定番であろう「肉」を書かず、「粗大」と書いたのである。ゴミである。ヒドス。

「・・・コホン、失礼。改めまして、この紅魔館に何か御用ですか？」

丁寧な口調で話しかけられたが、目が笑っている。相当我慢してい

るのだろう。

「たまたま見えたんで寄ってみたらこのチャイナが寝てたからイタズラしてやった。後悔はしてないが公開はするぜ。あとはそうだな・
・この主に会いたい、かな？」

ものすごく自然にダジャレが効いていたため、またもや笑いそうになったメイドだったが、

「wwww・・・お嬢様に会いたいと？明確な理由はあるのかしら？なければお引き取り願いたいのだけど。」

持ち直しつつ、敵意を示しながら帰ってもらうよう告げた、しかし、これでおとなしくひきさがる京介だったら次の日には隕石が降っているだろう。

「理由は無いらし、帰るつもりもねえな。」

「そう・・・なら武力行使をさせてもらうわ。迷惑だし。」

「力ずくか・・・へへッ、戦いは好きだぜ？」

「あらそうなの？なら後悔はしないことね。美鈴、起きなさい。」と、メイドが美鈴に起きるよう呼びかけたが、起きる様子が無い。その様を見て京介はしょうがないと思い、

「起こしてやるうか？」

と言った。

「普通じゃ起きないわよ、美鈴は。」

「だろうな、ちよつと下がって耳塞いでろ。ルーミアもな。」

「わかったのだー！」

ルーミアは素直に聞き、いずれ戦闘になるであろうフィールドの範囲を考えつつ大きく後方に下がって耳を塞いだ。メイドも少し後へ数歩下がり耳を塞いだ。

（耳を塞ぐという事は・・・まあ、耳元で大きな声を放つのだろうけど・・・耳を塞ぐ程の声なのかしら？）

疑問に思ったが、どうにも嫌な予感がしたメイドは一応従う事にした。

「さて・・・すうううううううううう・・・」

美鈴の前から3歩程下がった京介は、息を大きく吸い込んだ。次の瞬間、

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
. . . ! ! ! ! !

ミサイルでも落ちたかのような巨大な爆音が響き渡った。

京介の、もはや技とも言える巨大な咆哮、「バインドボイス」。

さしもの美鈴も飛び起きるしか無かった。

「ヒギヤアア!?!?・・・え?・・・え?・?」

あまりの爆音に何が起きたか理解できていない美鈴だが、目の前に知らない人間がいるのと、その後方にメイドがいるのをみて、ようやく口を開いた。

「あ、咲夜さん！寝てません、寝てませんよ！！・・・とところで、お客様ですか？」

「・・・貴女は全くもう・・・いいわ。それよりお客様なんてないわ。そこにいるのは、“招かれざる客”よ。」

「！・・・そういうことですか、わかりました。・・・貴女が誰だかは知りませんが、命じられた以上、排除します！（あれ？お仕置きなし？何で？）」

即座に中国憲法特有の構えを取った美鈴、後方で僅かにふらつきながらもナイフを構えるメイド、咲夜。京介は、この2人を見て少し血がざわつくのを感じた。

「……いいね。そうこなくちゃ。」

京介もまた左拳を前に向け構えた。そして……

「Common lady! Let's rock!」

戦いの幕が切つて落とされた！！

舞台裏2回目

京介「“粗大”、ねえ……。」

作者「なんとなくコレにした。後悔せずに公開した。反省なんかするものか。」

京介「いや反省しろよ。ほぼ間違いなく怒られるぞ?」

作者「その時はその時だ。」(ドヤア……)

京介「ウザッ。……さて、前回は解説らしい解説もなかったからな。今回はちゃんとやんぞ。」

作者「だな。」

京介「さて、まず水面を走ってる件なんだが、時間とスピードについてはキバヤシ理論すら無視してそういうもんなんだと考えてくれ。」

作者「計算してないから適当に書いたんだよな、この部分。まあ、距離書いてないし多分大丈夫だろ。」

京介「どうだかな。でもどっちにしる計算しないだろ?」

作者「算数は不得意科目です。」

京介「せめて数学と書け。別にいいけど。」

作者「ほいほい。さて、次はさっきもちよい言ったペンで「粗大」の落書き?」

京介「いやそこはいいだろ。たまたまバッグに入ってたんだし。」

作者「まあでもアレ油性ペンだしな。かわいそすぎるだろ。」

京介「いやだからこのストーリー考えたのお前だからな!？」

作者「まあ、この話はその辺に投げ捨てて。」

京介「話フツたのお前だけだな!？」

作者「うるせえ。さて、にしても今回ちよつと状況が理解しにくいかもな。」

京介「しょうがないだろ。モチベあがんなかったから2話目から大分離れてたんだから。お前が悪いだけな。」

作者「うるせえ。で、2人相手だけとお前勝てるの？」

京介「まあ勝つけどな、次回分かるわけだが、すんげえあつけないぞ？」

作者「だな。でもまああんまり時間かけてもいられんからな。」

京介「まあな。この話を観てくれてる人がいるかどうかはかなり怪しいが、もしいるならあんまり長引かせて全然先に進まないなんてのもどうもな。」

作者「かなりつまらん戦いになったけどな。」

京介「その辺はお前の文章力にかかってるがな。」

作者「文才の概念すらあるかどうか怪しいです。」

京介「そんな状態だったらこの話自体ないわアホ。」

作者「フハハハハ!!」

京介「笑うな五月蠅い。」

作者「だからって銃口をこつち向けんな。」

京介「チツ。」

作者「このヤロウ・・・。つかこの楽屋裏さ、毎日出来るもんじゃねえんだよな。」

京介「ぶつちやけここが一番考えるのが疲れる。」

作者「この舞台裏プロット組んでないからな。」

京介「まあ、次回も適当だろうな。それでも観てくれる方がいるのなら幸いです。」

作者「まあそういうことだ。さて、長々と話してしまいましたが、

これにて終了です。」

京介「次回は第4話です。観ていただけるのならどうか期待せずお待ち下さい。」

作者「それでは・・・!」

「Sweet dream・・・」

京介「最後気持ち悪いなこれは・・・orz。」
作者「普通に締めればよかった・・・orz。」

第3話 「カッコいいと思ってた服がエライ勢いで色が薄くなってきた件とかは

舞台裏かなり長くなりました。スイマセン。

で、「次回はあつけない」と書きましたが、正直次回から字数を増やそうと思っているので、意外とあつけないのかもしれないのかもしれない。まあ、なんにせよ作者である私の力量に依りますけどね。

それでは次回またお会いしましょう。m | m

第4話 「剣術3倍段？知るか！とにかく叩き潰せ！！」 （前書き）

どうも、第4話投稿しました。

殺気って感じるものなんですかね？そんな状況に置かれた事無いのでわかりませんねやっぱり。

ちなみに美鈴は結構好みだったりします。・・・イデッ、誰だバス停投げたの！！

第4話 「剣術3倍段？知るか！とにかく叩き潰せ！！」

「参ります！！」

中国拳法独特の構えを保ちながら美鈴が突撃した。京介もまた左腕の肘を軽く曲げた状態で拳を前に、右腕を腰溜めに、膝を緩めて中腰の状態で構えた。京介は美鈴のことを侮ってはいない。中国拳法の達人、加えて妖怪であることを知っている。そして美鈴は地上接近戦では最強とも言える存在である。並の相手なら瞬殺されるだろう。

しかし、京介もまた普通ではなかった。美鈴の怒濤の攻撃を京介は次々に避ける。拳打、肘、上段蹴り、正拳、膝、体当て、悉く避け続ける。

「・・・中々速いですね！この私が接近戦で捉えられないなんて！」
「ハッ、お褒めいただき光荣だな。さて・・・そろそろこっちから行くぜ！！」

美鈴の左拳打をわざとギリギリで避けた京介は、一瞬左拳を腰に溜めて、左足をやや前に出した中腰の状態から一気に美鈴の右脇腹へ拳を突き刺した！

ズドンッ！！！！

「ご・・・は・・・！？」

重いハンマーを叩き付けたかのような衝撃音。武術における剛体法の基本“内功”と“外功”を固め、気を練り上げる防御。美鈴は戦いにおいてこの防御法は常にかけているのだが、京介の放つたりバ―ブローはこの防御法をいとも簡単に突破した。

「お、すげえ・・・流石に耐えたな。」

それでも致命傷は受けていないようで、美鈴は歯を食いしばって倒れずにいた。しかし足が震えて言う事を効かなくなってしまう、機

動力が落ちてしまった。

「げほっ・・・なんて威力ですか・・・。仮にも妖怪である私をボデイブローで悶絶させるなんて尋常じゃないですよ？」

殆どの妖怪は人間より耐久力がある。個人差はあれど、まず人間に負ける妖怪など、例外を除いてほばいない。たとえ人間と内部の構造が同じであつたとしても、外部はこと戦闘や狩りにおいては非常に硬くなる。ましてや美鈴は中国拳法の達人。内部も内功を練ることで衝撃をある程度弾くこともできる。

しかし相手は京介である。普通の人間の常識は通じない。美鈴はそこを読み違えたのだ。しかし京介のことを知らないので無理もない話である。

「お前は見た目人間と同じだ。なら体の構造も大体同じなんじゃねえかなってな。妖怪故に普通より耐久力があつたとしても、多分いけるだろと思つたのよ。結果はビンゴだつたな。」

「・・・だからといって私にこんな攻撃をしたのはあなたが初めてですよ。私を負かした人も何人かいましたけど、少なくとも初撃がボデイブローというのはありませんでしたよ。」

「妖怪だし何処殴つても硬いとは思つたがな。まあでもオレはこの攻撃、“リアルインパクト”つつうんだけどさ、結構好きなんだよ・・・。加えてお前さんは中国拳法の達人。なら体内を強化するため漢方の心得もあるんじゃないかねえかなって思つてな。漢方はいざ作成しても自分で接種しなきゃ効能はわからん。そもそも人間が健康云々にも使つてる生薬だ。効き目を確認するにも人間と同じ内部構造してなきゃ多分人間と同じ効果は得られない。で、お前は自分で試して効能があると確信。なら内部構造はほば同じと考えていい。ならボデイ結構効くんじゃね？とか思つたら効いたってわけだ。」

「・・・恐ろしいですね。」

美鈴はそう言つたが、何に恐れたのか。攻撃力云々ではない。その発想と勘、そしてなにより実行力である。美鈴はたしかに中国出身の妖怪ではある。だが妖怪故に、漢方を習っているかと言えば、想

像はできてもそれが真実と言えるかどうかは全くわからない。漢方の処方を知っているからといって実際に試したかどうか、体内構造が同じかどうかは判断しかねる。だというのに京介はそんな仮説を立てて、即座に攻撃を敢行したのだ。間違っていたらどうする気だったのか。勘が外れて次の瞬間に死んでしまったら？この男に恐怖心はないのだろうか。規格外とかではない。予想が外れたらただのバカである。しかし京介の言った事は全て当たっているのだ。故にこの男は運も強い。

美鈴は戦慄が走った。

「・・・あなたは一体何者なんですか？」

「拳で訊いてみな？」

要するに、倒して吐かせてみなということ。京介は挑発している。武術家である美鈴がこれで乗らない筈が無かった。

「・・・わかりました。そこまで言われて引き下がる私ではありません。全力で参ります。」

「そうこなくちゃな。」

言い終わった瞬間2人は超接近戦を開始した。ここで先に攻撃を喰らったのは京介だった。中国拳法独特の攻撃法、寸勁である。

「ぐうつ・・・（ゼロ距離攻撃か・・・厄介だな）。」

こんなことでやられる京介ではないが、一瞬でも体を止められてしまう。しかし美鈴もこれを撃つのに一瞬の溜めと、技後硬直がある。一瞬後に2人とも動ける。しかし京介の方が僅かに不利と言える。（ダメージを積み重ねられたらちよつとマズいかな？・・・アレ出して反応視るか。）

突然京介は美鈴の攻撃を右腕のみでいなし始めた。ただいなすのではない。美鈴の攻撃を全て、コロの原理で腕を回転させることによって攻撃を他方向へそらしている。

「な！？それは“化勁”！！」

この男は中国憲法を知っているのか？思わず僅かとはいえ疑問に思ってしまったのが京介にとって大きな隙となった。

「戦場で余計な事考えたら・・・“BAD END”だぜ!!」

ドオンッ!!!!!!

美鈴ですら視認できないスピードで左拳が顔面に直撃した。ただ直撃しただけでなく、余りの威力に後方へ大きく殴り跳ばされてしまった。

ドゴッ!!

「ガハッ・・・グ・・・」

紅魔館の外壁（塀のことだが表現合ってるだろうか？）にめり込んで美鈴は気を失った。

「うしっ、1人目終わりだな・・・にしても待機してるとは思わなかったぞ。」

「美鈴は1対1の勝負を好むから。」

そう、まだ戦いは終わりではない。この紅魔館のメイドが残っていた。

「さ、続いていくわよ？」

「連戦だな。少し休ませてほしいぜ全く。」

「そんなこと許す筈無いでしょう。貴方は敵なんだから。」

そう告げるとメイドはナイフを両手に、まるでジャグラーかなにかのように4本ずつ指に挟んで斜に構えた。両腕は体の真横斜め下に向けている。

「さて・・・え？」

前方にいた筈のメイドがいない。それこそ最初からいなかったかのように消えた。

「・・・！上か!!」

殺気を感じた京介は直ぐさまその場から飛び退いた。何かが地面に刺さった音を聞いて振り返ってみれば、自分がいた所に数本のナイ

フが刺さっていた。

「そうか．．．さつき 咲夜」 って言ってたな．．．アンタが十
六夜咲夜、 “ 時の従者 ” か。」

「アラ、その二つ名いいわね。さらに美鈴だけでなく私の事も知ってるなんて光栄ね。」

「ケツ、光栄と思うならいきなりナイフ投げるのは辞めてほしいもんだね。明らかに不意打ちじゃねえか。もつと堂々と来いよ。」

「フツ、あいにく能力も相まって、そういうのは性分じゃないの」

気が付けば咲夜は背後。京介は本能で危険を感じて、咲夜が眼前から消えた瞬間に回避をしたが、一瞬遅かったようด้วย首筋に切り傷がつけられていた。

（動脈はいつてないか。まあそんなことで死ぬオレじゃねえけど・・・時止めか・・・・・面倒だな。）

そう考えていると、咲夜が無数のナイフを放ってきた。京介は機動力を上げた。F1もかくやというスピードで次々に避けていく。

そのスピードに咲夜は軽く驚いた。

（参ったわね、全然当たらないなんて・・・なら！）

咲夜は再び時を止めながらあらゆる方向から京介に向かって、先ほどとは段違いな数のナイフを放った。

「うおっ！？流石に数があんなこりゃ！！」

言うや否や京介は腰のホルスターから2丁拳銃を取り出した。無骨で飾り気の無い、黒い銃である。

.....

京介はナイフに向けて高速射撃を開始した。サブマシンガン以上の射撃速度で次々にナイフを撃ち落としていった。しかし、

「
・
・
・
げ。
」

気が付けば大量のナイフがスキマ無く京介を囲んでいた。

「手こずったけどコレで終わりね。」

いつの間にか門の前に移動した咲夜が頭上で指を鳴らした瞬間、空中で停止していたナイフが一斉に京介を襲った。

（まいったな、ノーダメで済ませるつもりだったのに・・・しゃーねえな！）

ドスドスドスドスドスッ！！

流石に全て刺さるわけじゃないが、それでも無数のナイフが京介の体に突き刺さった。

「グッ・・・ガッ・・・」

心臓や頭にも刺さり、京介は倒れてしまった。

「フウッ、思ったよりも時間かけちゃったわね。それにしても・・・」

「

地面には大量のナイフの残骸。ざっと視て400以上はあるだろうか。京介はこれだけのナイフを2丁拳銃で撃ち落としたのだ。恐ろしい射撃速度である。

「油断したら死んでいたかもしれないわね。・・・まあでも終わったんだし、気にする事も無いかな。」

ナイフや京介は後で片付けるとして、まずは美鈴のところへ向かうとした。

「油断は禁物だぜ？」

「え！？」

背後から声。咲夜が振り向いた先には、

「・・・う・・・そ・・・何で・・・！！？」

ユラリと。

無数のナイフが刺さったままで。心臓にも、頭にも、全身に、まるでサボテンのような状態で、幽鬼の如く悠然と立ち上がる京介がい

た。

「そんな・・・バカな・・・」

「最後の最後で爪が甘いぜ、嬢ちゃん。」

言った瞬間、京介は咲夜の背後に高速移動した。

ガッ！

「アゲツ・・・」

首筋に手刀を喰らい、驚愕している隙をつかれた咲夜は気を失ってしまった。

敗因は京介という人物を読み切れなかったことだろう。仮にも美鈴を凌駕する強さを持つ京介に対して、常識を当てはめることが間違いだった。妖怪である美鈴を素手で倒した。この時点で既に普通の人間じゃない。そしてここは幻想郷。常識は通用しない。つまり、京介が“人間であるかどうか”をも疑ってかかるべきであったのだ。殺した、と思い込んで最後に気を抜いたのは間違いなく失敗。うめき声も、倒れた様も、全て京介の演技。京介は自身に宿る“悪魔の力”を利用し、わざとナイフに刺されて咲夜が油断するのを待っていたのである。結果、咲夜は惨敗に終わってしまった。

●●●

side：京介

「いっつ・・・しっかし容赦ないなあ、ったく。」

咲夜のナイフを体から次々に抜いていく。でも痛いもんは痛いわ！！いくら心臓や頭刺されたくらいじゃ死なないからって痛覚はあるしな。こりゃ調子に乗りすぎたか？

「まあ・・・いいか。終わった事だし。」

とりあえずオレは紅魔館へ入るのに、付き添いで来ていたルーミアを呼んだ。

「おい、ルーミアー!!」

「ぐー・・・ぐー・・・」

「寝てんのかよ!?!?!?」

京介「・・・はい、それでは始めました舞台裏。こんなんが正直面白いかどうかつつたら面白くないでしょうけども、どうぞ観て下さい！」

作者「テンション高いなオイ。」

京介「まあな。バトルは好きだからな、そりゃ興奮もするさ。」

作者「つまりhshs・・・ってことか。」

京介「わかりにくくも変態的な表現すんな。」

作者「まあそれは置いて、やっとまともにバトルしたな。」

京介「まあそうだな。いい準備運動にはなったぜ。」

作者「・・・お前東方のキャラクターなめてんだろ。」

京介「んなこたねえよ。（ものすごい笑顔）」

作者「つたく・・・さて、少々解説入ろうか。」

京介「おう、まずは・・・“リアルインパクト”かな？」

作者「まんまDMCのダンテの技だな。厳密に言えばリアルインパクトってボディブローじゃないみたいだがな。」

京介「やったことあんのがDMC4だけだし、そもそもゲーム内でお前繰り出した事ないもんな。」

作者「やり方知らんもん。」

京介「まあ特になんだってこともないがな。さて次は“内部構造”か？」

作者「美鈴とか人型の妖怪のな。まあ、原作にも体内までは何にも書いてないしな。ウチだけの設定ってことで人型の妖怪の体内構造、特に臓器のあり方は人間とほぼ同じってことで。あくまでウチだけの設定なので他の作品とかで比較したりとかはしないで下さい。まあ、多分する人いないとは思いますが、一応ここに記しておきます。」

京介「漢方の処方云々もな。」

作者「おう。さてお次は・・・“咲夜の最初の構え”は？」

京介「あれはそうだな・・・咲夜のフィギュアとかで判断だな。似たようなポーズのやつあるし。」

作者「ああ、アレか。アレ買つてすぐ時計の針折れたっけな。すんげえ悲しかったが。」

京介「アレか。ちよつとつittedただけで折れたからな。脆すぎだろ。」

作者「もうくつつけたけどな。さて次、“悪魔の力”・・・でいいか？」

京介「悪魔の力つてよりアレは“悪魔の特性”とでも言うのかね？」
作者「それが近いかな？要はDMCのダンテやネロみたいにそう簡単には死なないって話だ。」

京介「まあな。そんな認識で合ってる。さあ次だ。“ルーミア”。」
作者「寝てるとかどうなつてんだアイツ。」

京介「あの状況でよく寝れるな。ちなみにアイツ美鈴がボディ喰らったとき辺りから寝てたぜ。」

作者「もうずつと寝てろよ。」

京介「そんなわけにはいかんがな。さて・・・結局ダメージ喰らったなオレ。」

作者「それ考える前に既に美鈴に寸勁喰らつてんじゃん。」

京介「あんなんダメージのうちに入るかアホ。」

作者「いや入れるよバカ。どんだけ耐久力あんだよ。」

京介「ほつとけ。さて、そろそろ終わらすか。」

作者「だな。それでは次回お会いしましょう！」m|m

京介「よろしければまた観に来て下さいませ！」m|m

京介「最後の挨拶毎回字数揃うよな。
作者「だよな。何か気持ち悪いよな。」
「orz
orz

第4話 「剣術3倍段？知るか！とにかく叩き潰せ！！」 （後書き）

書いてすぐ投稿したので、やはりおかしい所が出てくるかもしれません。その時は改訂しますので、もしよろしければ、感想やアドバイスをいただけたらと思います。

美鈴ですが、求聞史紀だと「武術の達人」とあるだけなので、もしかしたら他の武術も出す可能性があります。

スペカはまだ出ません。多分6話辺りからだ。今回スペカ使わなかったのは、美鈴戦は京介が美鈴の土俵で超接近戦をしたからスペカなど使う暇がありませんでした。咲夜戦では咲夜が慢心して、スペカを使わずに勝てると思っていました。故に負けました。こんな感じです。苦しいですかね？

あと、咲夜の言葉で同じ行に「」が2つありますが、時を止めて移動したのを表現するのにこういった方法をとりました。他に思いつかなかったもので。

次回もなるべく早めに投稿するつもりですが、少々忙しくなりそうなので今までより遅れると思います。ご了承下さい。

それでは次回またお会いしましょう。m——m

第5話 「学校の机の中に時々給食のパンが入ってたりは・・・しないか。」

どうも、第5話投稿しました。

原作の方では記述が無いのですが、咲夜の能力を少し弄りました。空間掌握に関しては寝ている間も持続できるようにしてあります。

ウチの設定ですので他の所には持つて行かないようにしてください。

では、第5話、始めます。あ、外に売店ありますのでポップコーンでも食べながら観て下さい。今回は前回に比べて短いですけどね。

第5話 「学校の机の中に時々給食のパンが入ってたりは・・・しないか。」

戦闘が終わり、地面にそのまま置いておくのも可哀想なので、美鈴は壁に寄っかからせるように座らせて、咲夜は京介が抱えてつれていく事にした（お姫さまだっことですjk）。

「とりあえず美鈴はそこでいいとして、咲夜はまあ・・・主の元にも連れてくか。さて、ルーミア、行くぞ。」

「おーっ！」

元気のいい返事をするルーミア。さっきまでおねんねしていたとは思えないくらいである。

門を通ると、そこは広い庭園。花壇は綺麗に花が咲いていた。美鈴が咲夜が手入れしているのであるうか、素晴らしく色鮮やかに、まるで自分が一番だとも言っているかのように咲き誇っている。

「すげえ・・・壮観だな。つか花観て感想言うの多分初めてだわ。」

「そーなのかー？」

「まあな。花なんか興味ないし、ろくにみたりもしなかったからな。流石にこう正面でこんだけ咲いてると感想の1つも言わざるを得ないな。」

「・・・そーなのかー。」

「そればっかだなお前・・・。」

おなじみの言葉ばかり吐くルーミアを視て軽いため息を吐いた京介。話を切り上げて館内へ入る事にした。

玄関の扉は鍵がかかっていなかった。無防備と思う者もいるかもしれないが、ここは紅魔館。普通の人間は住んでいないのである。ここにいるのは、魔法使い、妖精メイド、そして吸血鬼。文字通り人外魔境といえる。そんなところに好んで入る人間はいないだろう。故に鍵をかける必要性もないのである。しかし、ここの吸血鬼の知

られざる情報をもっている京介は、どうひっくり返しても魔の巣窟とは思えないのであった。

玄関を通った途端、京介は少し驚いた。

「・・・紅っ！ちよつとこれは気持ち悪くなるぞ・・・。」

館内は、見渡す限り紅、紅、紅。どこを視ても血のように紅いのだ。一体何を考えてこんな内装にしたのだろうか。外も紅いが、中は度を超えている。何もかもが紅い。

「うわぁ・・・正直吐き気するぞ。まいっとな、ここまで紅いのかよ。」

京介は基本ワインレッド色は好きである。服の好みも大体ワインレッドかブラック。そんな京介も、この内装には軽く頭痛を覚えた。今度この屋敷に来たら白いペンキでもぶっかけてやろうか、そんなことさえ考える京介であった。

「私は入った事あるから見慣れたけど、確かに紅いよね。初めて来た人間には辛いかも。」

ルーミアがそう述べる。京介は吐き気、頭痛、さらには目眩もしている。もう少しで治りそうだが、正直ルーミアの言う通り辛かった。とりあえず軽度のもので一応は大丈夫なのだろうが、今戦闘に入ったらちよつとキツイ、そんな事を考えながらもとりあえず館内を歩いてみようと思う京介であった。

廊下は長く、1つ1つの部屋がかなり広い。これも咲夜的能力であろうか。

「確か咲夜は時間と空間を操る筈・・・改めて考えるとスゲエもんだな、コイツの能力って。」

京介の両腕には咲夜が抱えられている。未だ目を覚まさないようだ。恐らく日々の疲れが溜まってでもいたのだろう。何せ咲夜はメイド長。妖精メイドに指示を出し、夜はこの吸血鬼の世話をする。あげく能力を駆使しながら仕事をこなす。疲れが溜まるのも無理は無

いのである。故に目覚めるのはもう少し先になりそうだ。

歩けども歩けども次の扉が見えてこない。4つ目に見つけた部屋を出てから5分は経っている。最初に門の前で咲夜を視たとき、咲夜は買い物袋を手に持っていた。ということは食糧か何かを買い出しに行っていたという事。つまり、咲夜はこの紅魔館を出る時、セキリティー的な問題で“館内”という空間を弄って広くしているのだろう。だから次の部屋の入り口が見えてこない。しかし少々やりすぎではなからうか。

「広すぎたら館内にいるヤツらも移動疲れるんじゃないか？」

「そうだね。私も少し疲れたのか？」

「だから何で疑問系・・・まあいいや。」

そんな事を言っていた時、後ろから何か叫び声が聞こえて来た。後ろを見るとなんと、妖精メイドが大量に向かって来ていた。

「うわっ・・・相手にすんのもめんどくせえ。ルーミア、背中に捕まれ。走るぞ。」

「おっけーん「普通に返事しろ。」・・・はい。」

危険なセリフを吐きそうだったが、ギリギリ京介に止められた。・・・殆ど言っているが。

そんなことはさておき妖精メイドが何か武器を持って向かって来たので、京介は足に少々力を入れて、一気に廊下を走った。

妖精メイド達は当然追いつけない。しかし前方からも妖精メイドが姿を現した。

「つとあ・・・お？」

ちょうど丁字路。京介は直角に曲がって右の廊下を走った。妖精メイドは目の前で直角に方向転換されたことに驚いて足が止まってしまった。後方から来たメイドが右の廊下を見たときには、京介の姿を見失っていた。どこかで曲がって行ったのだろう。

京介は、咲夜を抱えて走っている。故に咲夜に余計な負担等をかけないように走った。かつて京介はボディガードの依頼を受けた時、敵から逃げるために護衛対象を背負い、一切負担をかけずに逃げ切った事がある。故に京介にとって眠っている者に負担をかけないよう移動する事など、造作も無い事なのである。加えて高速で廊下をジグザグに曲がって行っただけで妖精メイドはまず追いつけない。そして幸運な事に、妖精メイドはあそこにいたのが全員のようで、あの丁字路を抜けてからは一切出会う事はなかった。まとまっていた方が戦闘に於いて有利とでも思ったのだろうか。その辺は妖精らしく頭が弱いようであった。

しばらくして京介は立ち止まった。逃げ切っただけからは色々な部屋を観たが、今度はひととき大きな両開きの扉のある部屋へ来た。扉の上には、「LIBRARY」とある。

「ここは・・・図書館か。なるほど、たしか正式名称は「ヴワル魔法図書館」だったか？」

「随分走ったよね。」

「まあな。30分くらいは走り続けたんじゃない？いくらなんでも広すぎだろ。」

それだけ咲夜が“家族”を大切にしているととれるが、この住人に心配はあまり必要じゃない気がする京介であった。

「まあ、いいや。たしかここは・・・“アイツ”がいるんだったな。ちようどいい、色々訊いてみるか。ルーミア、開けてくれ。」

「はい！」

ルーミアの元気な返事とともに、図書館への扉が開かれた。

「……どうやら知らない者が入って来たようね。」

「……追い払いますか？」

「……出来るのならそうして。出来なければ極力バレないようにこつちに誘導して。試したかったものもあるからむしろちょうどいいかもしれない。まあ、弱い存在だったら無意味だけれど、もし貴女の攻撃に耐えられるような存在なら、お願いね？」

「……了解しました！」　パタパタ……。

「……さて、どうしたものかしらね。」

第5話 「学校の机の中に時々給食のパンが入ってたりは・・・しないか。」

舞台裏4回目

京介「さて、今日も舞台裏始まったわけだが、どうした？」

作者「暑くてモチベが上がりらん・・・。」

京介「・・・まあ頑張れ。それしか言えない。」

作者「はあ・・・とりあえず解説やろうか？」

京介「今回はあんまり話す事なさそうだな。」

作者「まあな。さてまずは・・・段落ごとに一行空けたんだがどうだろう？」

京介「・・・段落じゃなくて全体的に一行ずつ空けてもいいんじゃないかね？」

作者「あんまり空けるとスクロールとか面倒かって思ってたな。」

京介「それはお前自身が感じた事だろ。客観的に考えなきゃな。」

作者「まあそうなんだよな。詰め過ぎず、且つ広げ過ぎないようにするってのは結構難しいぜ。」

京介「そこはお前の文章力にかかってるけどな。」

作者「まあ、ここはもつと考えてみるわ。」

京介「だな。でもこの舞台裏は全体的に一行空けてんだよな。」

作者「まあな、まだ試験的にやってみただけだが、正直どうでしょう？この方が観やすいですかね？」

京介「これで大丈夫でしたら本編もこんな感じにします。さて、次は？」

作者「そっぴゃお前の性格って基本どんな感じなん？」

京介「オレ？・・・ダンテに近いかな。戦い始めたりとか相手をボコボコにする時は時々スラング使うし。バトルスタイルとかもダンテと似てるし」

作者「にやるほど。なんつーかお前らしいとは言えるのかな？」

京介「つかテメエが書いたんだろ、オレの事は。自分の書いたキャラくらい把握しとけ。」

作者「だってお前時々一人歩きするんだもん。」

京介「そこは置いとけ。はい次！」

作者「んゝ・・・妖精メイドかな？」

京介「玄関入ってすぐん所にはいなかったな。多分門から入って来たオレを窓から観て、急いで全員集めに行ったんだろっな。」

作者「協調性はあってもそこからの対策は練ってない。流石妖精、ちょっと頭がよろしくないな。」

京介「でもお前そのうち妖精にだまされんじゃね?」

作者「ないわアホ。・・・たぶん。」

京介「そうかい。さて、今日はこんな所だろ。」

作者「だな。今回本編は前回に比べて短いな。」

京介「館内を駆け回るだけだったからな。この辺は充分には組んでなかったし。」

作者「まあな。さあ、ここで終わりだな。」

京介「それでは今回も観ていただきありがとうございます!」 m

— m

作者「よろしければ次回もまた観に来て下さい!それでは!」 m

— m

京介「・・・最後の「！！」はズルいだろバカ。」 or z
作者「・・・スマン、全然思いつかなかったぜ。」 or z

よろしければ感想、アドバイス等お願い致します。

第6話 「さっき喰ったわらび餅は美味かったなあ。」 (前書き)

パチュリーの「さて、」が多くなってしまいました。
でも、気にしないで下さい。

では、開幕です。

第6話 「さつき喰ったわらび餅は美味かったなあ。」

扉を開けた先は迷宮のようだった。本棚がどこまでも並んでいて、壮観だった。京介もこれには感嘆の意を唱えた。

「マジかよコレ・・・スゲー・・・ある程度予想は付けてたけど、こいつは想像以上だぜ・・・。」

驚きながらも京介は足を進めた。今はとりあえずこの図書館の管理者を見つける事を優先しなければならない。とはいえこれだけ広いとどう探せばいいのか見当もつかない。だからといって考えていても始まらない。なので京介は歩いてみる事にした。

「ルーミア、管理者・・・“パチュリー・ノーレッジ”の居場所は分からないか？」

「紅魔館に何度も入った事はあるけど、図書館は2、3回しか入った事無いし、見ての通り、コレだけ広いからちよつとわからないよ。」

「そつか・・・まあしゃあないな。こんな広い上に本棚の迷路になつてんだし、把握してんのは精々ウン十年管理してるやつだけだろうな。」

流石に仕方ないと思い、京介はこの迷宮を歩いてみる事にした。

正直京介は迷路は結構好きである。しかしそれはあくまでテレビゲームでの話である。自分が実際に自分の足で迷路を攻略するなど、考えもしなかった。かつて自分の世界で京介は迷宮に入って蔓延る悪魔を退治した事がある。だがその時は迷路を普通に進もうとは思わず、壁を吹き飛ばしながら強引に進んだ。しかし今回は勝手が違う。ここは図書館。貴重な魔導書や文献等が本棚に詰め込まれている。学者や魔法使いにとっては宝物庫とも言えるのである。そしてこここの管理者も当然ながら魔法使い。流石に京介も人の貴重品を無碍にするなんてことはしないのであった。

しばらく歩いていくと、前方から何かが飛んで来た。容姿は、頭に悪魔の羽のような小さな突起物、背中に悪魔の翼が生えていて、頭髮はダークレッド、服飾は黒といったところである。顔はあどけない、だがしつかりした面持ちの少女である。

「貴方が侵入者ですね！排除させていただきます！！」

突然少女が叫んだと思ったら、いきなりエネルギーの弾を放って来た。これが弾幕と呼ばれるものか。大量の弾幕は京介を取り囲むように放たれ、向かって来た。京介はとっさにそれを高速で腕の中の咲夜に負担をかけないように回避し、少女に叫んだ。

「・・・！？バツカやろ、咲夜に当たったらどうすんだボケ！！」

「・・・はっ！？」

言われるまで気付かなかったようだ。こいつの目は節穴だろうか？

「ったく・・・まあちょうどいいや。オイ、ここの管理者パチユリ

ー・ノーレヅジはお前の主だろ？案内しな。」

「お断りします！何をする気かは知りませんが、パチユリー様には貴方に出て行ってもらうように言われていますので、これ以上進ませません！」

割と本気の目をして“小悪魔”は言った。しかし、小悪魔のこの発言には、失敗があった。

「・・・そんなに必死になって“これ以上進ませない”ってことは、もうしばらく歩けばパチユリーの所に割とすぐ着けるってことだな？」

「・・・！？しまっ・・・」

「ほれ、今「しまった」って言おうとしたろ？そして立ち位置がさつきと変わってる。」

今の立ち位置。つまり京介は小悪魔が来た方に、小悪魔は京介が歩いて来た方にいる。京介は小悪魔の攻撃をただ避けたのではなく、攻撃方向を誘導しながら後方へ回り込んだのだ。そして前方に邪魔者がいないので、このまま奥へ進んでいけばいい。後方からの攻撃

など京介は当然の如く回避できる。大分楽である。しかし、

「まあ、そのままダッシュしまえばいいんだけど、お前の攻撃なんぞ屁でもねえからゆっくり歩く事にするわ。」

京介は完全に小悪魔を嘗めきっていた。先ほどの弾幕で大体の実力は理解した。これ以上弾幕のパワーやスピードが上昇しても対した事はないと当たりをつけたのだ。余裕の表情で京介は小悪魔に背を向けて、悠然と歩き出した。

「・・・バカにしてるんですか！？許せません！・・・背中しか攻撃出来ないorz」

それでも小悪魔は頑張って京介の背中に弾幕を集中攻撃した。しかし京介、全くこたえず、ブレる事もなく、さも当たり前のように歩き続けた。

「・・・ひん。」(TDT)

小悪魔は泣きながらも懸命に攻撃するがコゲ跡1つすらつかない京介の理不尽ぶり。

(うつつ、悔しいけど強いよ。。。パチユリー様に言われてる事もあるし、一旦退かなきゃ。)

絶えず悠然と歩く京介を泣き顔で睨みつけながら小悪魔は姿を消した。

●●●

side: 京介

「あれ？」

いつの間にか小悪魔がいなくなつてやがる。諦めたか？。。。いや、あんな悔しそうな顔してたのに潔く消えるとは思えねえ。。。主の元へ誘つてる？

「ルーミア、どう思う？」

「んゝ・・・小悪魔さんは主に忠実だから、通常は自分が戦闘不能になるまでやる筈だよ。」

「やっぱりそうか。誘ってるかどうかはわからんが、何かを企んでるのは間違いなさそうだな。まあ、何企んでようと全部ブツ飛ばしてやるけど、フム・・・。」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、か。・・・よし、行つてやろうじゃないの！」

「ノリノリだね、お兄さん。」

「まあな。・・・そういや名乗ってないな。」

「あ、そうだね。なんて言うの？」

「神崎京介だ。改めてよろしくな、ルーミア。」

「うん！知ってるみたいだけど、改めまして。ルーミアだよ、よろしくね！」

「おう。」

「ここまで来てやっと名乗るとか遅っ。・・・まあいいか。」

「ん？」

歩き続ける事十数分。先に見える十字路に本が大量に積まれた机がある。どっかで視たような光景だけど、まああそこにいそうだな。

・・・

「来たわね。」

本を整理してパチュリーが姿を現した。イメージカラーはパープル。“動かない大図書館”の異名を持つパチュリー・ノーレッジである。

「想像通りの姿だな。アンタがパチュリーか。」

「ええ、そうよ。何で想像できたのかは知らないけど。」

「そう言いながらパチュリーは本を数冊取り出した。」

「まあどうだっていいじゃないか。それより、アンタに訊きたい事がある。」

「“レミイ”の部屋ね？」

「・・・まあ、わかるか。」

「ええ、貴方のような強者がレミイに興味を示さないわけがない。それに貴方は好戦的。さらには咲夜を抱えている。あとは小悪魔が教えてくれた貴方の大体のステータスですぐにわかるわ。」

パチュリーは取り出した本を自分の周りに浮遊させた。次にひき出しの音がしたかと思ったら、フラスコと試験管を取り出した。この2つもまた宙に浮いた。

「さて、私は今新しい魔法の実験をしてるの。でも攻撃魔法なんだけど、当てる対象がいなくて困ってたのよ。」

「・・・。。。。。」

「そんなときにちょうど貴方が来た。小悪魔の攻撃でビクともしないならたぶん耐えられるでしょう。」

「・・・要するに実験体になれてるか？」

「確かにそうだけど・・・貴方も納得いくように、ここは勝負としましょう。」

パチュリーとしては京介に実験体になってもらいたい。しかしそれだけでは京介が納得する事は無いだろう、ならば新魔法の性能も色々調べたいし、調整もしたい。これを考えた結果、勝負をするのが一番だと考えたのである。

「なるほど、小悪魔が途中で引き下がったのは、そういうためか。」

「そういうこと。・・・さて。こあ、準備しなさい。一緒にやるわよ?。」

「え?パチュリー様だけで十分じゃないんですか?お言葉ですが流石にパチュリー様の實力ならあの男に勝てると思うのですが。」

「無理よ。というか貴女と一緒に勝てるかどうかわからない。彼が強いのは既にわかってるわ。それこそたぶん・・・“レミイ”と互角になるかもしれないくらい。」

小悪魔は絶句した。今日の前にいる男は、単に耐久力があるだけの人を苛つかせる低能だと考えていた。それがパチュリーをここまで言わせたのだ。

「・・・そんなに強いんですか？」

「強いわ。だから一緒に戦ってちょうだい。・・・さて、そっちは今言った勝負ってことでいいかしら？」

京介としては特に問題なかった。勝負というのなら喜んでやる。そもそも戦いを好むこの男にとって、今の申し出は断る要素などなかった。ただし、本来の目的もある。それを考えて京介は口を開いた。「勝負つてのは賛成だ。むしろそっちから言ってくれるとは思わなかったぜ。ただし、オレが勝ったら・・・」

と、話している途中でパチュリーが口を挟んだ。

「レミイの居場所でしょ？ いいわよ。というより貴方の抱えてる咲夜が目覚めたらそれも分かるでしょ。だから勝負が終わったら私が回復して起こすわ。それでいいでしょ？」

「・・・ああ、それでいい。・・・そういやお前喘息あんじゃねえの？ 戦って大丈夫か？」

「今日は調子がいいのよ。薬も飲んでるし。それに、気分転換の1つもしたいのよ。」

パチュリーから意外な発言が飛び出した。いや、それも当然と言えば当然だろう。いくら“魔法使い”という種族でも、図書館で書物を読み、整理し、座ったきりというのは健康上非常に悪い（魔法使いが健康を考えるかどうかは知らないが）。気分転換の1つもしたくなるのはむしろ必然だろう。

（普段どんな気分転換してんのか気になる所だが・・・まあどうでもいいか。）

京介は2丁拳銃を取り出す。自らの世界では悪魔討伐でよく使っている拳銃、“タルウィ”と“ザリク”だ。京介自作のもので、銃身がデザートイーグルより僅かに大きいものである。頑強に出来ており、剣による斬撃を受けとめる事も出来る優れものである。これを

最初に出した理由は、それだけパチュリーが魔法使いとして相当の実力者である事を示している。

「さて、それじゃ・・・楽しいパーティーの開幕と行くか!!」

「魔法使いの力、魅せてあげるわ!」

「ルーミアは咲夜を視てるのだ〜!」

（実は起きてるのに起きるタイミングが・・・出るに出れなくなっ
てしまった・・・）

咲夜エ・・・。

第6話 「さっき喰ったわらび餅は美味かったなあ。」 (後書き)

舞台裏5回目

京介「さて、今回も始めました舞台裏です。・・・何してんだお前？」

作者「・・・怠い・・・暑い・・・。。。」

京介「知るかそんなこと。次回さつさと書け。」

作者「どぎついぜ・・・。まあいいか、頑張るぜ！」

京介「急にテンション上がったな。まあいいや。さて、今回は・・・いつもよりグダグダだな。」

作者「暑いからな。」

京介「理由になってないし。」

作者「そっぴやお前ナイフの傷は？」

京介「まだあるぞ。大分治ってきたけど。」

作者「悪魔め。」

京介「何か言ったか？」

作者「いや別に。さて、次は・・・小悪魔可哀想だな・・・。」

京介「しゃあないだろ、初めて弾幕喰らったけどスゲー弱いんだもん。」

作者「そっぴや今回やつと少し弾幕出したんだよな。」

京介「オリジナルスペカでも作ってやったら？」

作者「考える暇があればな。さて、次は・・・いよいよパチュリー出てきたな。」

京介「パチュリー中々戦闘に積極的じゃね？」

作者「別に戦闘が嫌いってわけじゃないだろ。」

京介「だろうな。要するに図書館であんまり暴れたくないだけだろうな。」

作者「今回は？図書館でやるみたいだけど。」

京介「次回どうするかわかる。」

作者「にやるほど。・・・つか小悪魔なんだか弱過ぎるな。」

京介「相手の実力の見極めもできてないからな。少し調整しといった方がいい気もするな。」

作者「まあそこはパチュリーに任せるといっことで。」

京介「他人任せかよ。」

作者「さて、今回はこれにて閉幕です。」

京介「それでは次回またお会いしましょう！」
m | m

作者「よろしければ次回も観て下さいませ！」
m | m

京介「いい加減揃うのキモイ。」
o r z

作者「それを言うなバカ野郎。」
o r z

第7話「窓開けて扇風機回すと涼しいぜ。」（前書き）

お待たせしました。前回から大分離れてしまいましたが、
ようやく出来ました。駄作ですが暇な時間でいいのでどうか観てやっ
て下さい。

それでは第7話、開幕です。書き損じとか無きやいいけど・・・（
不安）。

第7話「窓開けて扇風機回すと涼しいぜ。」

ドオンッ！

燃え盛る幾つもの火球が京介に向かって飛んできた。最初は銃で打ち消そうとも思ったが、思いの外パチュリーから発射された火球がかなりの大きさだったので、銃では無理と判断、最小限の動作で回避することにしたのだ。

ドオンッ！ズドン！！

標的に回避された火球は床や本棚に当たり、決して威力の低い爆発をおこしている。

パチュリーにとっては新しい魔法の実験、京介にとっては楽しいバトル、小悪魔にとってはリベンジ。これはスperlカードルールは適用されない、純粋な闘い。一歩間違えれば並みの人間では死んでいるであろう。

しかし、こんなときでも京介とパチュリーは笑っていた。

「ハハッ、流石に魔法使いだな！スゲエ威力じゃねえか！」

「私も少し驚いてるわ。意外にもつのね、貴方。」

戦闘開始から既に10分が経過しているが、京介もパチュリーも疲労の色を全く見せていない。一人はデビルハンター、もう一人は七色の魔法使い。たかだか10分激しく動いた程度でへこたれるなどというのはあり得なかった。

しかし、小悪魔だけは驚愕していた。

（何で・・・あんなに動いておきながら・・・あの男は汗ひとつかいてないんですか！？）

パチュリーは空を飛びながら魔法を放っている。ほぼ魔力を使っているだけである。対して京介は、肉体を駆使して避け続け、同時に銃撃を行っている。時折回避の困難な攻撃が来たときは、魔力で脚部を強化して強引に回避している。よく考えれば運動量がまるで違うのである。

にもかかわらず、京介はさも当然であるかのように、人間が目視するには困難なスピードで動いているのだ。小悪魔が驚くのもムリはなかった。

それでも、主の所へ来るまでの過程で軽くあしらわれた屈辱をはらすためにも、息も絶え絶えになりながら、それでも小悪魔は必死に食らいついていた。

「大したもんだな、アイツは！オレの動きに辛うじてついてきてやがるぜ！」

「当然でしょ！私の使い魔なのよ？この程度でへばるほど柔じゃないわ！」

「ハッハア！そりゃいいや！そうでなきゃ面白くねえぜ！」

京介は縦横無尽に駆け回り、無数の弾幕を全て避け、小さいながらも避けきれそうにないものは銃撃で撃ち抜き、巨大で避けきれないものは魔力で脚力を底上げして無理矢理避けていた。それでも未だに疲労の色は全く見せず、狂気すら伺える程の笑顔を保ちながら明らかにこの戦いを楽しんでいた。ただ、京介にとってはこれがむしろ当たり前であった。命がけの殺し合いですら楽しみながら戦う、それこそが京介のバトルスタイルなのである。

（さて・・・そろそろパチュリーも仕掛けてきそうかな？）

などと考えていた矢先、

「さあ、そろそろ私の新しい魔法の実験に付き合ってもらわよ。」
言うや否やパチュリーは自身の前に魔力で球状の力場を作り出した。
色はクリアブラックといったところだろうか。半透明の黒っぽいバ
レーボールのようなものがパチュリーの前で磁気を帯びながら浮い
ている。

「座標固定、限定完了。・・・発動！」

「がっ・・・・・・・・！？」

パチュリーの前から謎の球体が消えた瞬間、京介の体は信じられな
いくらい重くなった。普段が68キロである筈の京介は自分の体が
重くなった事に驚きを感じながらも、冷静に分析した。

（・・・要するに一種の重力魔法か？東方の資料視た限りパチュリ
ーは重力魔法は使わない筈・・・なるほど、確かに新魔法だな。）

「どうかしら？私の新魔法・・・その名も・・・」

間を置いてパチュリーが言った名はある意味衝撃的だった。

「・・・・・・「グラビデ」よ!-!-」
（ネタかコラァ!?!）

思わず京介は声に出す所だったが、この世界にはそのテのものがあ
るかどうかわからず怪しいのでギリギリで飲み込んだ。

「・・・何かしら？私のネーミングセンスに不満でも？（ドヤ顔）」

「・・・いや別に。（普通に“アレ”がありそうで怖いぞオイ!?!）

」

出来れば有ってほしくない。だってアレ現役だし。そう切実に願う京介であつたが、とりあえずは今の状況をどうにかすることが先決だつた。

「・・・まあ、確かにスゲエよ。重力魔法たあな、驚いたぜ。・・・でもよ、相手が悪かつたな。」

「え？」

パチュリーにそう言うと、京介は突然全身からとんでもない量の赤黒い高濃度の魔力を噴出させた。その量は凄まじく、周囲に張られている結界が揺さぶられて今にも吹き飛びそうなくらいである。

「・・・ウソ・・・何・・・あの魔力・・・」

パチュリーからすればとんでもないことである。いくら相手が強いといつても、個人が出せる魔力量を遥かに超えているのだ。驚くのも無理はなかつた。

しかし、本当の驚愕はここからだつた。

「んじゃあ・・・行くぜ!!」

ズドンッ!!

何か巨大なモノが地面に激突したかのような音が響き、京介が爆走した。体感重量は普段の10倍、つまり680キロもの重さになっている筈の京介が、今まさに砲弾の如くパチュリーへ向かつて突撃してきたのだ。それも先ほど弾幕を避けていた時と変わらない速度で。

「ちよつ、何よそれ!？」

驚きながらも既に眼前に迫っていた京介を間一髪で回避したパチュリー。しかしその顔は驚愕と困惑、恐怖の表情を入り組ませていた。「へへッ、よく避けたじゃねえか。まあ手加減してたんだから尚更だがな。」

「・・・手加減?今ので手加減!?!重力魔法がかかっているにもか

かわらずさつきと変わらない速度で突っ込んできておいて本気じゃないですって!？」

「ホレ、次いくぜ? YEAHHHHH!!」

今度は猛スピードで殴りかかった京介。とんでもないスピードでラッシュをかける京介に対して驚愕と恐怖を感じたパチュリーは弾幕を繰り出しながら天井付近まで飛んだ。京介はパチュリーを見て舌打ちをした。

「・・・なるほど、貴方飛べないのね。」

「まあな。オレの姉は飛べるんだけどオレは飛べないんだよ。」

(・・・ならこちらにもまだ勝機はあるわね。)

パチュリーは魔法術式を自身の前に展開し、先ほどの重力魔法を最大レベルまであげて京介に繰り出した。

「う・・・・・・おお・・・・・・!？」

今の京介の体重は実に2トン。普通なら重さに耐えられず潰れてしまいうレベルである。しかし京介はかつて悪魔を狩るとき、その辺の潰れた車等をさも当たり前のようにポイポイ投げて攻撃した事もある。ロードローラーさえ片手で持ち上げられる怪力を持っているので、この程度の重量は苦にはならなかった。とは言え、今の重量では流石に動きを制限されてしまう。パチュリーはホッとしていた。

しかし京介は未だ不敵な笑みを絶やさずにいた。

「・・・いきなり重量が増えてビックリしたぜ。流石にキツいな。・
・でもよ、この程度で参ってたら・・・デビルハンターなんて務まらないんでね!」

バリンツ!!

叫んだと同時に先ほどよりも膨大で高密度の魔力を引き出したことで、京介の体にかかっていた重力魔法の術式が音を立てて壊れてしまった。

「嘘！？術式が・・・！！」

同時にパチュリーの手元で展開していた重力魔法を操作する術式方陣も消滅した。これを確認するや否や、京介は跳んだ。しかしただ跳んだだけでは当然パチュリーには届かない。対策として京介は空中に魔法陣を展開し、足場として使った。それこそ何度も造つては足場にして、驚きつつも逃げるパチュリーの元へ跳躍した。

「なっ・・・なんてデタラメな・・・！！魔法陣を足場にするなんて聞いた事無いわよ！？」

「そうか？案外いそうな気もするんだけどな！」

等と言っている間に京介はパチュリーからおおよそ15m離れた正面に魔法陣を造り、着地。そのまま魔法陣を維持させた。

京介としてはそろそろ潮時だと考えた。そもそもパチュリーが新魔法の実験をしたいからという理由で、“手加減していた”が、気が付けば戦闘を始めて1時間が経過していた。おそらくは自分の存在を知っていて待っている“この主”も待ちくたびれているかもしれないし、京介自身もそろそろこの戦いに終止符を打とうと考えていた。

「さて・・・そろそろ実験もいいだろう？」

「ええ、正直貴方じゃこの魔法の結果が散々だからなんとも言えないけど、色々計算出来たからなんとかなったわ。・・・ただ、どちらにしろ私に勝たないと貴方は先に進めないわよ？」

「だろうな。だから・・・そろそろ終わりにするぜ！！」

ゴウッ！！

突然の魔力の奔流。パチュリーは何度目になるかわからない驚愕を味わった。まだ魔力が上がるのかと。

「とりあえず・・・アイツにはさっさとご退場願うぜ！」

パチュリーではなく左方向を向いた京介。その先には小悪魔が構え

ていた。これを京介は先ほどよりも速い動きで小悪魔の懷に一瞬で近づき、当て身をした。

「がつ!?!」

それなりに威力を入れていたため、小悪魔は気絶して床へ向かつて落下した。それを見向きもせず京介はすぐにパチュリーへと高速で跳躍した。

「このっ……!!日符「ロイヤルフレア」!!」

パチュリーの眼前に魔法陣が出現し、光輝く炎弾が京介に向かって発射された。しかし京介はこれを悉く避け、当たりそうなものは魔力すら使わず拳を突き出し、拳圧だけでかき消した。

「な……何よそれ!?この……木&火符「フォレストブレイズ」!!……「ウォーターエルフ」!!……「サテライトヒマワリ」……!!」

パチュリーも負けじと京介に対して様々な属性の魔法の弾幕を放つも、その全てを銃撃や拳圧、強靱な蹴りでかき消されていく。たまにまともに当たったりもするのだが、それにより生じた煙の中からまるで無傷の京介が飛び出すのだから、パチュリーにとってはたまったものではない。

「ぐ……火水木金土符「賢者n」「遅えよ。」……!?!」
パチュリーの必殺魔法でもある「賢者の石」。しかし出がかりを京介に潰されてしまった。

「へっ、特別にコイツをお見舞いしてやる!寝ちまいな!!」

京介はパチュリーの襟を掴むと、自身の体から高压電流を放出した。

バリバリバリバリ……!!!!

「いやああああ……!?!?!」

ゼロ距離で電撃を浴びたパチュリーはとうとう気を失ってしまった。これを京介、襟から手を放し、素早く抱き上げた。

「まあ……手加減したからすぐ目覚めんだろ。」

等と能天気な感じが、パチュリーに負担をかけないように“エアハイク”で徐々に降りて、床へ着地した。そしてパチュリーをゆっくり床に寝かせて、回復を早めるためにも魔力をパチュリーへ送るのだった。

「……う……ん？」

咲夜が目覚めるとそこは図書館だった。自分はいつの間にこんな所へ？と考えて、急に思い出した。

「はっ、そういえばあの男は！？」

「ようやくお目覚めね。」

「……パチュリー様？」

横を見ればそこにはパチュリーが座っていた。手元には魔導書がある。回復魔法についての記述があるところから、自分を目覚めさせてくれたのはパチュリーだと考えた。そして、

「よう、寝ばすけさんよ。」

イラッと思いながらも後ろを振り向けばそこには件の男がいた。隣にはルーミアが気持ち良さそうに眠っている。

「その子いつまで寝てるのよ？」

「知らん。咲夜を看てるって言うておきながら、数分もしないうちに寝てやがったぜ。」

「……えっと……パチュリー様？一体何が……？」

「ああ、そうね。説明するわ。」

魔女説明中……デビルハンター仮眠中……

「……ということよ。結果、私の負け、レミイの部屋を教える事になったの。でも咲夜、貴方がいるんだから、彼に教えてあげなさいな。」

「え、でも・・・」

「それに、レミイもたぶん待っているわ。この男が来るのを。」

「え・・・あ、なるほど。」

側にはいつの間にか起きたのか、京介とルーミアが遊んでいる。京介がルーミアを肩車しているが、まるで親子のようである。

「・・・わかりました。彼、神崎京介をお嬢さまの所へ連れて行きます。」

「お願いね？・・・それと、レミイの用事とかが済んだらもう一度彼をここに来るよう言っておいて。」

「かしこまりました。」

一礼した後、咲夜は京介とルーミアを呼んだ。

「2人とも、これからお嬢さまの所へ行くわ。ついてきて。」

「オーライ。やっと主さんに挨拶できるぜ。」

3人は図書館を後にした。

「????」・・・遅ーーーーーい!!!まだなの!?しゃくやーーーー

「――！」

生まれたての子鹿のようにプルプルしながらひたすら当主は待っていた。

第7話「窓開けて扇風機回すと涼しいぜ。」（後書き）

舞台裏6回目

京介「遅え！！どんだけ待たせてんだバカヤロウ！！」

作者「スイマセン。」m|m

京介「全くよ・・・ホントにウチのバカがすみませんでした。」

作者「ホントに申し訳ない。モチベがあげられないからってこんなに時間がかかってしまつて。」

京介「前回から一ヶ月過ぎてんぞ?」

作者「今度はこんなことないようにする。」

京介「・・・とりあえず続いでるだけでも僥倖だ。このままさつさと書き続ける。」

作者「了解。さて、今回は対パチュリー戦だったわけだが、正直グダグダになったな。」

京介「前回から大分離れてたツケだな。文章が少々おかしくなつてやがる。」

作者「そこは大目に見て下さると助かります。・・・イダッ!?石飛んできた!」

京介「当然の報いだ。で、パチュリーとオレはともかく、小悪魔がちょっと不憫だな。」

作者「出番が後半から薄かったからな。正直これが限界だった。」

京介「いずれ小悪魔にも活躍させるんだろ？」

作者「大分先になるけどな。」

京介「ならいい。さて、そういや本棚よく壊れたりしないな。」

作者「戦闘前にパチュリーが自分で本棚に魔法をかけて傷1つつかないようにしてたから。描写なかったけど、脳内補完してくれれば幸いです。」

京介「書けよな。」

作者「ごめんなさい。」

京介「で、あとはないかな？こんなもんだろ。」

作者「そう、だな。とりあえずはこんなところか。」

京介「それでは次回お会いしましょう。」 m | m

作者「ご視聴ありがとうございました。」 m | m

京介「未だにそろそろよな最後は。」
作者「それもこの作品の特徴だ。」

第8話「さつき喰ったお菓子が餃子味だった件について」(前書き)

サブタイに意味はありません。(笑)

さて、第8話、開幕です。

ちよつとでも観ていただければ幸いです。

さて、今回もヘナヘナの文章ですね・・・。

第8話「さつき喰ったお菓子餃子味だった件について」

「一応訊くけど、貴方は何故レミリアお嬢様にお会いしたいの？」
咲夜はふとそんな事を京介に問いかけた。というのも、本来この館の当主、レミリア・スカーレットに会いたい等と言う者は一部を除いて皆無であつたからである。余程の事が無い限り積極的に会うなんて事はまずないだろう、というより恐怖で紅魔館にすら近づくのは躊躇われるのである。

しかしこの男はつくづく規格外のようである。

「あ？決まってるんだろ、闘いてえのさ！」

普通の人間ではないのは実際に戦闘をした身である故、嫌という程わかつていた。しかし、ここまでの戦闘狂はおそらく“太陽の焔”の主辺りしか知らない。考えてみればこの男は一体何者なのだろう、咲夜は疑問を持ちはじめた。

「つかせつかく幻想郷に来たんだから色々なヤツに会ってみたいしな。で、強いヤツがいるんだろ？ならやることは1つだ、戦ってみたい。今はただそれだけさ。」

ここで咲夜は1つの疑問を解消した。そう、この男はこの幻想郷の住人ではないのだ。予想はつけていたものの、確信は持てなかった。何せこの幻想郷は意外と広い。自分がまだ視ぬ存在もいるのやもしれない。今まで視てきたものが全てではない事は当然、故にこの男のことを少し知りたくなつたのである。

「・・・外来人だったのね。」

「まあな、わからなかったか？」

「半信半疑だったわ。パチュリー様はもしかしたら確信があつたのかもしれないけど。」

「なら何でパチュリーに訊かなかった？」

「貴方に直接色々訊こうと思ったのよ。疑問は自分で調べる、常識

でしょ？」

「・・・だな。で、オレが外から来たのは解消されたんだろ？他に訊きたい事は？」

「そうね・・・」

2人は色々訊きながら紅魔館の長い廊下を歩いて行った。

しばらくして両扉のある部屋の前で咲夜が立ち止まった。扉には「Remilia's room」という札が掛けられている。しかし、

「・・・アレは、何だ？」（困）

「・・・私の趣味です。」（照）

扉の上には可愛らしく「？おぜうさまのお部屋？」と書かれている。かなり頑丈な素材で出来ているようで、所々によく見ないと分からない程の細かい傷がついている。おそらくレミリアがなんとか取り外そうとしたのだろう。当主であり、カリスマを体現する筈の存在が随分とファンシーなキャラクターになってしまっている。主に従者のせいだが。

「・・・お前もいい性格してんな。」（汗）

「・・・お嬢様が可愛いからイけないのよ。」（鼻血）

「字がおかしいぞオイ！？つか忠誠心漏れてるし！！」（困）

そんなこんなでようやく扉を開けようとしたのだが、

『しゃくや〜！！まだなの〜！！早く連れてきなさいよ〜！！』

部屋の中から正体不明の可愛らしい声が聞こえてきた。

『しゃくや〜！！しゃくや〜・・・うう・・・』

京介はものすごい罪悪感を感じたが、それと同時に、まだ視ぬ当主に同情してしまった。

（この従者・・・確信犯だろ絶対。ここの当主も大変だな。）

「はぁ・・・おぜうさまの可愛い声・・・ブッフ。」（鼻血）

（オレの前で隠そうともしねえし・・・つかいい加減鼻血はやめろ

ww)

改めて。

扉を開けると、奥の玉座に女の子が座っていた。彼女こそこの紅魔館の現当主、吸血鬼レミリア・スカーレットである。

「お嬢様、お客様を連れてきました。」

「フフ・・・ようこそ、人間。私がレミリア・スカーレットよ。」

流石に強者だけあって、威圧感はかなりのあるものがある。その瞳は紅く、口元には牙が見え隠れしている。まさしく吸血鬼である。

「神崎京介だ。よろしくな。」

「ええ、よろしく。・・・咲夜。」

「はい、お嬢様。」

咲夜の声で京介が振り向いた時、咲夜はその手に紅茶のセットをお盆に乗せて持っていた。おそらく能力を使用したのだろう。とはいえ何とも恐ろしい程の手際の良さである。

「へっ、流石に瀟洒な従者つてか。いいメイドだな、レミリアよ？」

「咲夜は私の自慢のメイドよ。このくらいできて当たり前。」

咲夜が紅茶を入れている間レミリアは常に微笑を帯びながら、京介の瞳を真っ直ぐに視ていた。

実はこの時、レミリアは京介にあることをしていたのだが、それは失敗に終わっていた。

（・・・私の魅了の瞳に囚われるどころか、意にも介さないなんて・・・それにこの男、さつきから魔力が少しも感じられない。感知させない程までに抑えられるみたいね。・・・さつき図書館からした音、そしてこの男が無傷であることを考えれば、相当の実力者ね。）

京介はレミリアの瞳の力に気付いていた。

（コイツ・・・吸血鬼特有の魅了の魔眼使いやがったな。意味ねえけど。つても隙はないし、常に高圧的な態度を崩さない。かといってオレをバカにするような態度は一切とらない、さらにコイツからは魔力を微量にしか感じない。実力を隠してゐるってこったな。確かこの幻想郷に於いて吸血鬼は高位の存在である筈。・・・へへッ、ちよっと引っかけてみるか。）

そもそも京介はレミリアに会い、そして戦うために紅魔館へ来た。今はただそれだけが望みなのである。故に他の事は特に気にしてはいなかった。

「私の事は咲夜やパチュリーに訊いて知っているようなね。」

「訊かなくてもある程度は知ってたけどな。話す手間でも省けたか？」

「ええ、正直言つて説明するのは面倒なのよ。私の事を知りたいのなら他に訊いてもらつてゐるわ。」

「・・・なるほどね。まあ、吸血鬼の根城に入ろうってんだ、事前に知ってなきゃおかしいけどな。」

「そういうことね。私の館に入ってくる物好きなんてそうそうないけね。せいぜい・・・貴方くらいのものよ？」

「そうかい、褒め言葉として受け取っておくぜ。」

ここでいよいよ京介はレミリアを弄つてみる事にした。が、その前に咲夜が口を挟んだ。

「お嬢様、おかわりはいかがですか？」

「ええ、いただくわ。」

「畏まりました。」

紅茶がカップに注がれていく。その間にレミリアはお茶請けのクッキーを齧った。

しかし、

「・・・・・・・・ぶうえええ!？」

凄い勢いでレミリアはクッキーを真横に吹き出した。流石に京介もコレには目を丸くした。

「咲夜!？このクッキー入ってるの!？」

「ピーマンを混ぜました。」（真面目）

「何故に!？」

「お嬢様は苦手な食べ物が多すぎますので克服してもらおうかと思
い、混ぜました。苦手意識をなくさなければ、カリスマも何もない
ですよ？」（真面目）

「だからって何もクッキーに入れなくてもいいじゃない!そもそも
お菓子にピーマンを入れる発想がおかしいわよ!？」（汗）

「存じております。ですので苦手であれば入れませんでした。」

（ドヤ）

「・・・・・・・・しゃくや・・・・・・・・。」（涙）

流石に目の前でメイドによるカリスマブレイクを見られるとは思っ
てもみなかった。流石にこのメイド長は弄り方を知っている。いい
センスだ。ただ、

（ああ、おぜう様の泣き顔・・・濡れるっ!）（鼻血）

忠誠心だだ漏れなのはいい加減どうかと思った京介だった。しかし
これで弄りやすくなったので、この流れにノってみることにした。

「・・・・・・・・ククツ、ハハハハハ!」

笑い声を上げた瞬間、レミリアが京介を睨んだ（涙目で）。

「・・・・・・・・何がおかしいのよ？」

「いや、目の前でお前のカリスマブレイクが見られるとは思っても
みなかったぜ!まさに“かりちゅま”だなオイ!」

挑発。京介は少し大げさに手を叩きながらレミリアに向かって爆笑
している。これに対し、レミリアは少し憤慨した。

「何よ“かりちゅま”って!？カリスマでしょ!？」

「お前なんざ“かりちゅま”で十分だろ。見た目と考え方が既にそ

うなんだから。」

「見た目言っな！というか私の考え方の何が”かりちゅま”なのよ！？」

「不夜城レッド（笑）」。

「笑っなバカっ！！」

咲夜は予想外の珍事が発生して、思わず歓喜してしまった。

（おぜう様があんなにも“かりちゅま”を・・・ブバツ！！）（盛大に鼻血）

「咲夜っ！？」

どうやら咲夜は自分の主の可愛さに耐えきれなくなって昇天したようだ（萌え的な意味で）。コレを見て京介は盛大に爆笑した。

「又ハハハ！！“かりちゅま”攻撃力ありすぎだろ！！ブハハハハ・・・！！」

「何よ！貴方のせいでしょ！？」

「全世界ナイトメア（笑）」。

「・・・そんなに私を怒らせたいの？」

段々とレミリアが殺気を帯び、瞳の赤が強くなってきた。

「（もう一押しか、ならとどめだ！）更に言えばこんな挑発でキレルしよ・・・ハッ、当主がそんなんじやたかが知れてんな。器も小さいし、ただのクソガキだな、くだらねえ。」

・・・ゴウッ！！！！

瞬間、家具が総て吹き飛び、粉々になった。

「・・・いいだろう、貴様の挑発しかと受け取った。せめて後悔しないよう、全力で潰してやる。」

先ほどとは違って変わって、レミリアから大量の魔力が吹き出している。京介を凄まじい殺気を以て睨みつけた。

「（かかったな。）ヘッ、潰す、ねえ・・・やれるのならやってみな！」

京介もまた高密度の魔力を身体から噴出させ、2丁拳銃を自分の真横斜め下に向け、身体は少し右斜めに向いて直立姿勢、顔はレミリアに向けている。ガンスリンガースタイルを駆使する京介の本来の構えである。

ふと気が付けば、部屋が広くなっていた。

（あゝ・・・そういや咲夜は空間も操れたっけな。結構便利だなこりゃ。）

戦闘をするにも十分な広さになっている。互いに戦闘準備も整っている。咲夜は部屋の入り口に下がり、ルーミアも咲夜の隣に付いた。

これから起こるのは、

「さあ、懺悔とお祈りは済んだかしら？」

暴風雨の如く狂ったダンスパーティー。

「へっ、あいにく祈る神なんざいないんでね！」

2人は同時に床を蹴り、

ズドオオオオン・・・！！

その強大な力でぶつかりあった。

「Die！！」

「Let's rock！！」

ル「鼻血拭く？」つハンカチ
咲「・・・ありがとう。」

第8話「さつき喰ったお菓子餃子味だった件について」(後書き)

舞台裏7回目

京介「意外に早く出来たな。」

ぼろ「なんとかな。結構大変だったぜ。」

京介「でも少し文字数少くないか？」

ぼろ「まあ、戦闘前だし、このくらいだろ。戦闘になったら出来るだけ盛り上げるためにも文字数かなり使うさ。」

京介「そうかい。・・・ところでお前、その「ぼろ」って何だよ？」

ぼろ「何か響きいいからこの舞台裏では「ぼろ」にした。」

京介「ふーん、まあいいか。バランスもいいし。」

ぼろ「オレのことなんざいいだろ。解説入るぞ。」

京介「了解。しかしオレスゲエ戦闘狂だな。戦うのは好きだけどせいぜいダンテと同じくらいだぜ？」

ぼろ「十分戦闘狂じゃねえか。・・・つか、自分で調べるのは常識ってのはどうなんだ？」

京介「まあ、そんなもんだろ。自分で調べた方が納得の行く事も多

いし。まあ人それぞれだろうけど。」

ぼろ「ここらへんはまあどうでもいいか。で、咲夜ヤバすぎだろ。」

京介「お前が書いたのも相当なもんだが、色んな作品で咲夜は忠誠心だだ漏れだからな。」

ぼろ「まあそんなだからやってみたけど、以降がかなりの弄り専門のギャグキャラになりそうで怖い。」

京介「自分で書いたんだから責任はちゃんと持てよ?」

ぼろ「当たり前だ。しかしやっぱりレミリアはスゲエ弄られるな。」

京介「第1話書く前にこれだけは既に決めてたからな。」

ぼろ「つかお前魔眼は悉く無効化出来るよな?」

京介「まあな。理由は一応あるけど、まだ出さないつもりだ。これは設定にも書いてないしな。」

ぼろ「まあ、時期が来たら書くつもりなんでお待ち下さい。」

京介「つか最後の言葉が完全にアレだろ。大丈夫か?」

ぼろ「大丈夫だ、問題なんて踏みつぶせ。」

京介「そんなこと言った作者見た事ねえよ。」

ぼろ「「どうでもいい」。さて、そろそろ閉幕だ。」

京介「次回も観ていただければ幸いです。」 m (| (m

ぼろ「それでは次回お会いしましょう!!」 m (| (m

京介「何で最後P3のセリフ使った？」 (。A。(

ぼろ「無性に使いたくなっただよ。」 (、(

第？話「パスワードを書いたメモを何処にしまったかを忘れる事が多々ある」

文才の無い私ですが、戦闘シーンは特に難しいです。

観ていただけるなら幸いです。

では、第9話開幕です。

・・・え？チケット代は返さないよ？w

第?話「パスワードを書いたメモを何処にしまったかを忘れる事が多々ある」

[illegible]

マズルフラッシュが連続で光る。同時に強烈な銃撃音が部屋全体に響く。無論京介の2丁拳銃が火を吹いているのである。京介は疾風の如く、部屋全体を駆け巡りながら高速射撃を続けている。しかしレミリアには未だクリーンヒットしていない。時折タイミングをずらしながら撃ち込むも、かすり傷程度しかついていない。流石に人外の者、そう簡単にはやらせてくれない。

対するレミリアも、京介に向かって殺傷力のある弾幕を大量に生み出し撃ち込む。撃ち込みながら自身もヒットアンドアウェイで爪撃を繰り返すものの、紙一重で全て躲かれる。デビルハンターを営む京介がそう簡単に隙は見せてくれるわけではない。

お互いに実力者。ここまで既に10分が経過していた。

レミリアは、銃でかすり傷を負わされた事に少し驚いていた。

「・・・貴様のその銃、普通のそれとは違って、対人外用のモノだな？でなければ私に傷をつけることなぞできん筈だ。加えて貴様の射撃速度と命中率、相当慣れているな？ということとは、貴様の世界にも人外の者がいるということだ。」

超速で飛んでくる銃弾の嵐を次々に避けるレミリアに対して、京介は答えた。

「正解だ。中々どうして良い読みしてんじゃねえか。最強の吸血鬼
つてのもダテじゃないな！」

「なに、確認しただけだ。そも、2丁拳銃とその背中のデカイ剣を

見れば一目瞭然だろう。読めぬ者など皆無に等しい。」

「まあそうだな。・・・しかし速えな。追いきれねえぞ。」

「戯れ言を・・・貴様こそ恐ろしいスピードを出しているではないか。その調子だとまだ上がるのだろうか？もつと見せる。そして私を楽しませろ！そのために私を怒らせたのだろうか！」

ゴウツ！！

レミリアの発する魔力がより一層高まった。それと同時にレミリアは急激に方向転換をして、一瞬で京介の眼前へと迫った。

「うおつとお！！」

眼前へ伸びてきた右手の爪による攻撃をギリギリで、しかし余裕のある表情で首を左に倒して避け、そのレミリアの伸びきった右腕の上から、右腕に持つている銃をレミリアに向かって乱射した。しかしその瞬間レミリアが眼前から姿を消した。恐ろしいスピードで一瞬にして京介の後ろに回ったのだ。

ガキンツ！！

レミリアが左手の爪で京介の左肩甲骨を貫こうとした時、京介は右手に握っていた銃を天井付近まで投げ上げ、背負っていた魔剣の柄を右手で掴み、少し左にズラして爪攻撃を防御した。鈍い衝突音が響き渡る。しかしそんな音を聞いている暇もなく、お互いに直ぐさま攻撃に入った。

レミリアが両手の爪を交互に動かし斬り裂く。コレを京介は既に右手に握った魔剣で防御する。防御すると同時に左の銃でレミリアに高速射撃を繰り出す。レミリアは後方に連続バック転して避けずに突撃、京介の魔剣を握る右手を掴んだ。京介は左手の銃でレミリアを撃つも、超至近距離であるにもかかわらず、レミリアは目で

見て次々に避ける。それを見て京介は左手の銃を即座にホルスターに仕舞い、レミリアの、京介の右手を掴む左手の手首を掴み、恐ろしいスピードの背負い投げを繰り出した。

ドズンッ！！

「がはっ！？」

重い衝撃音とともに、レミリアは床に叩き付けられ、めり込んだ。

「っがああ！！」

一瞬後にレミリアが右腕を振り回す。

ヒュバツ！！

「チッ！」

咄嗟に避けたつもりだった京介だったが、左上腕を浅く斬り裂かれてしまった。しかし流血は派手であるものの、傷自体は大したことは無かった。レミリアから数m？離れると、頭上に手を上げた。同時に先ほど投げた銃が手に収まった。銃を投げて、落ちてくるまでにここまでの攻防を行える辺り、端から視れば恐ろし過ぎる2人である。2人は互いに睨み合いながら構えつつ、次の手を考えていた。

（・・・中身は普通の弾丸のようだが、魔力が込められているな。ある意味銀の弾丸より厄介だな。）

レミリアは殺気を保ちつつ、冷静に京介の攻撃方法や行動パターンを読み取っていた。しかし、行動パターンについては戦闘開始からずっと読もうとしていた。にもかかわらず、京介の動きがまるで読めない。というのも、京介は戦いに於いて、型というものが存在しない。あたかも無限であるかのような動きをするのである。常に相手の予想を裏切る攻撃を仕掛けてくるので、対処に一瞬の戸惑いを

覚えてしまふのだ。故にレミリアはうかつに飛び込もうとはせず、1つ強力な攻撃を出してみることにした。

（行動パターンが読めないのなら、自分が読めるようにすればいいだけだ！！）

その手には紅く濃い魔力が凝縮されていく。右手に造られたのは紅い槍。レミリアの技の1つ、“スピア・ザ・グングニル”だ。レミリアとしてはココで出すつもりはなかったが、京介の動きを見るなら、強力な攻撃の方がいくらかパターンを読みやすいと考えて、あえて出したのである。

一方京介も、先ほどキャッチした銃で肩を叩きながら、レミリアの行動を怪しんでいた。

（ここで例の槍出したか。．．．どういふつもりだかは知らんが．．．それより気になるのはアイツの“能力”だな。なんで使わないんだ？アレ使えば結構有利に出来るだろうに．．．。）

アレとはつまり、レミリアの“運命を操る程度の能力”である。レミリアはある程度のレヴェルの運命なら自らの意志で操作して、他者の運命を歪ませてしまふ力を持っている。コレを駆使すれば恐らく京介でもある程度の運命をねじ曲げられて、レミリアにとって都合の良い戦況になる筈である。にもかかわらず、レミリアが能力を使っている様子は見られない。

（何考えてんのか知らねえけど、とりあえず今だけは動きを読まれないってことだな。有難い限りだが、警戒だけはしとかないな．．．まあでも、あえてオレは突っ込むけどな！）

結局京介はレミリアに突撃した。しかし先ほどの攻防の時よりもスピードが上がっている。レミリアは迫る京介に向かって紅き槍を放った。

「喰らえ！スピア・ザ・グングニル！！」

ギョウツ！！！！

凄まじいスピードで槍が飛んだ。高速で飛ぶグングニルは一瞬で京介の眼前まで来た。コレを京介は、

「ぬりいよバカ、フンツ！！」

ガキンツ、ギャリリリリリリリガキユンツ！！

なんと剣を斜め上に勢いよく振り上げ、槍を斜め後方へ弾き飛ばしたのだ。しかも剣は片手で握っていて、もう片方は銃を握ったままである。標的を失った槍はそのまま斜め上に飛んでいき、天井に着弾して大爆発した。

しかし、そんなことで驚くレミリアではなかった。どんな形であれ、弾くのは装丁済、グングニルのすぐ後ろを走っていた。故に京介からはグングニルの大きさをレミリアの姿が隠れて見えなかった。「おっと！」

とは言え、そうそう喰らう京介ではなかった。前方に蹴りを繰り出し、レミリアの爪撃を受けとめた。その際、衝撃波が発生し、2人を中心に衝突音を響かせながら周囲に広がった。

「ヘッ、楽しくなってきたぜ！！」

京介が魔力を強めていく。負けじとレミリアも、

「チツ、はああああ！！」

魔力を上昇させていく。レミリアは先ほどの攻撃が失敗したことに對してショックを受けてはいない。受けきれんという想定もしていたので良しとしている。とりあえずこれで京介には生半可な攻撃や作戦では通じないと判断、ならやはり真っ向勝負しかないと考えた。しかし、

（ぐっ・・・！？こ、この男、どこまで魔力が上がるんだ！？だが・

・・なんだ、この高揚感は！！）

既にレミリアの魔力を京介は超えていた。にも関わらず、レミリアも未だ魔力が上昇していた。とうに限界の筈なのにまだ魔力が上がっていく。

「ぬうう・・・おおおおおお！！」

自分の意志に関わらず、魔力が限界を超えて上昇し、理性が飛んだ瞬間、レミリアは何を思ったのか急に動きを変え、策もなく真っ直ぐ京介に迫った。

それを京介は見逃す筈も無かった。

「慢心か油断か・・・いずれにせよ、らしくねえぜお前。」

ドズンッ！！！！

「ぐふっ・・・げ・・・は・・・！！？」

レミリアの繰り出した爪による突きを、銃をしまいながら左にギリギリで避けた京介。そしてレミリアの右脇腹に京介の鋼の如き重拳、リアルインパクトが撃ち込まれた。美鈴の時よりもずっと強力なそれは、レミリアを悶絶させ動きを止めてしまった。そして間髪入れず、

ズギユッ・・・・・・・・！！

「・・・がはっ・・・う・・・！！」

レミリアの背中から京介の魔剣の刃が突き出していた。血が溢れ、床に溜まっていく。

この瞬間、勝負は決まった。

「・・・オレの魔力と覇気に吞まれてたろ？それがお前の敗因だ。」

「・・・のようだ。ゴフツ・・・全く・・・私ともあろう者が・・・」

京介が剣を抜く。一層血を噴き出して、レミリアは倒れた。

「・・・あれ？」

倒れてもレミリアは吸血鬼。時間が経てば傷も修復されるものと思つた京介だったが、戦いが始まってからだろうか、何故かレミリアについた傷が全て再生していない。

「・・・あ！や、やべえ！！」

自分の魔剣に吸血鬼の弱点の1つである“銀”が含まれていることを京介はすっかり忘れていた。故にレミリアは極めて危険な状態になっていた。

「お嬢様！！」

流石に事態を理解し咲夜が一瞬で、レミリアと彼女を抱えて座つた京介の所に来た。

「悪い、魔剣の素材に銀が含まれてんの忘れてた。」（汗）

「忘れないでよバカ！！お嬢様！しっかりして下さい！！」（怒・焦）

レミリアは意識はまだ繋いでいるものの、身体はぐったりしていた。
「ゲフツ・・・ま、まいっ・・・たわね・・・再生・・・しな、いなんて・・・ゲホツ！」

「しゃべんな、ちよつと待ってる。」

そう言つと京介は突如自分の右手首を剣先で切り裂いた。

「ちよ、何を！？」

「だゝってる。」

咲夜からすれば京介の行動は異常である。普通自分の手首を躊躇なしに切り裂くだろうか。おそらく皆無であろう。

すると京介は切り裂いて血が吹き出ている手首をレミリアの口元に持っていった。

「オレの血を飲め。オレの魔力喰つて銀の毒吹き飛ばせ。」

予想外の発言を聞きレミリアは一瞬唖然としたものの、京介の血から魔力があふれているのを感じると、すぐに京介の血を啜った。すると、

ギョオオオオオオオオオ！！！！

凄まじい勢いで風が荒れ狂い、レミリアの傷がドンドン塞がっていった。

「お、お嬢様！？」

咲夜が驚く。身体から吹き出す魔力には仄かに銀の香りがする。魔力が吹き出すことで銀も吹き出しているのだろ。レミリアは勢いよく立ち上がり、自分の身体を確認しながら驚きを隠せずにいた。

そして魔力が治まり、傷が完治したレミリアは改めて自分の両手を見つめながら呟いた。

「・・・凄い・・・魔力が全快した・・・。」

「！？ホントですかお嬢様！？」

「オレの血は魔力が濃厚だからな、飲めばかなり魔力得られるぞ。」よく見れば破けていた服も治っていた。これも京介の魔力の恩恵だろうか。完全に治ったレミリアを見て咲夜は安堵した。それを見てレミリアは言った。

「心配かけたわね、咲夜。もう大丈夫よ。」

「ホントに心配しましたよお嬢様。ホントに良かった・・・。」

「ただ・・・。」

「・・・ただ？」

「鼻血出しながら安堵されてもね・・・。」（苦笑）

「はっ！？も、申し訳ありません！」

京・レ（必死に謝ってるのは分かるが、口の端がいやらしくつり上がってるのは何故？）

先ほどのレミリアのブレイクを今何故か思い出してしまっただけ謝りな

がらもにやけてしまっている咲夜がここにいた。
(それにしてもこの男の魔力・・・まさか銀を消し飛ばすなんてね。
しかもコレは・・・・・・・・・・。)

「いつから見てたの？」

ルーミアが扉に、振り向かずに意識だけを向けた。いつの間にか扉が僅かに開いていて、スキマからパチュリーと小悪魔、さらには美鈴までもが覗いていた。

「あら、気付いてたの？」

「戦ってる途中から気配してたからね。特に美鈴お姉ちゃんが分かりやすかったよ。」

「美鈴？」

「あはは、スミマセン。思わず気分が高ぶっちゃって・・・。」

「・・・まあ、気持ちは分からなくもないけどね。凄い戦いだっだし。」

「でも、どうみてもお互い殺す勢いでしたよね？パチュリー様。」

「そうね、実際京介はレミイをあの大きな剣で貫いたんだし。」

「あのボディブローも私にやった時よりも全然強力でしたよ。加えてずっと余裕の表情だったし、まだ本気ではないんですかね？」

「私の弾幕に全く動じなかったんですね。この戦いで改めて実力差がわかりました。さっきまでの自分が愚かに思えてきましたよ。」

（焦）

皆口々に今の戦闘の感想や京介の事を述べながら、三人の所に歩いていった。

薄暗い部屋。窓のない部屋。

「???? 何だろう・・・上から凄い力感じた。・・・遊んでるのかな？」

ランプに照らされて、影が揺らめいている。

「……ズルいなあ……私も……入れてよ。フ、フフ……フフフフフ。」

少女が、紅き瞳を、光らせていた。

「・・・・フフ、アハハハハハハハハハハ！キヤハハ
ハハハハハハハハハハ！！！」

狂気が。

メキッ・・・ベキベキベキ・・・！！

今、目覚めた。

第？話「パスワードを書いたメモを何処にしまったかを忘れる事が多々ある」

舞台裏8回目

京介「・・・・・・・・・・。」

ぼろ「・・・・・・・・・・。」

京介「・・・・・・・・何ぞコレ・・・・・・・・・・?」

ぼろ「・・・・いや・・・・あの・・・・・・・・・・。」

京介「わっかりづらいわ!!!!!!」

ぼろ「ぐはあっ!?(吐血)

京介「気持ち悪いぞこの戦闘の表現!?!何だコレ!?!今までで一番最悪じゃねえか!?!」

ぼろ「退きません!媚びへつらいません!?!反省しません!?!!」

京介「オイコラ!!」

ぼろ「書き手に逃走はないことだあああああ!!!」

京介「ある意味合ってるけどある意味盛大に間違ってるわボケエ!!」

ズドンッ！！

ぼろ「スイマセン取り乱しました。」

京介「もうええわ。とりあえず解説入れ。」

ぼろ「了解。とりあえず京介の戦闘スタイルに関してちょっと言わないとかな？」

京介「だな。オレは基本的に型を持たない、つてのは事実だ。まあ、“スタイル”つてのはあるけど、アレは単に銃を使ってるから”ガンスリンガースタイル”つてだけだ。銃を手にとっていけばソレはもう“スタイル”なのよ、オレにとっては。剣も同じく、手で握っていればそれだけで”ソードマスタースタイル”だ。加えて攻撃1つ1つは鋭かったり重かったりしても、動きは我流だから結構メチャクチャなんだぜ。だから“型が無い”んだ。」

ぼろ「本文読んでももしかしたら勘違いしてしまう人も少なからずいるかもしれないので、ここに補足しておきます。本文に上手く書ければよかったのですが、あいにく非才の身なもんで。スイマセン。」

京介「お前の非才ぶりは今に始まった事じゃないがな。」

ぼろ「うるへ。次に京介の魔力によって全回復したレミリアですが。」

京介「服も治った。残念ながらポロリはないぞ。」

ぼろ「ポロリとこぼれるものすらないですけどね。」

京介「・・・そんなこと言っているのか？本人と一部の読者に殴られるぞ？」

ぼろ「フハハハ。さて、レミリアの最後の言葉。次回書く予定ですが、ちよつと凄い事になってしまつかと。」

京介「分かってるヤツもいるかもしれねえが、レミリア結構好きするぜ。」

ぼろ「ただし、その前に最難関が待ち受けていますけどね。既に今回のラストに出てるので言っちゃいますけど、次は“悪魔の妹”が登場します。」

京介「今回は少し時間がかかるぜ。おおまかな内容は組んでるけど、本文はまだ書いてないからな。内容次第ではかなり長くなるかもしれないから、2つに分けるかもしれん。」

ぼろ「メンドクサイ小説ですが、観ていただければ幸いです。」

京介「それじゃみんな！」

ぼろ「次回を待たれよ！」

京介「エラそうな終わり方しやがってボケ。
ぼろ「いやもうホントにスイマセンでした。
「 m \ (、 A、
「 (| (|
m m /

第10話「部屋に ヤガビーの空き箱がずっと置いてある件」(前書き)

どうもです。お待たせしました。やっと書けました。

いよいよ悪魔の妹が登場です。

色々上手く表現できてるだろうか。それだけが懸念事項なのです。

仕方ねえ、読んでやろうじゃネエか！と言っていただけなら幸いです。

では、まもなく開演です。ごゆるりとおたのしみ下さいませ。

第10話「部屋に ヤガビーの空き箱がずっと置いてある件」

「しかし驚いたわ。」

レミリアが京介に向かって自分に起きた事を述べた。

「魔力が回復したのはいいけど、さらに銀を全部身体から吹き飛ばすなんてビックリしたわよ。」

「そんなにビックリする事か？」

「それだけじゃないわ。まさかとは思ったけど、感覚でわかるわ。私にはもう銀は毒にはならないわ。つまり、貴方の魔力と血液のおかげで銀を無効化できるようになったのよ！」

吸血鬼の弱点の1つに、“銀”がある。正確には銀の弾丸を心臓に受けると死んでしまうというものだが、銀が体内に侵入してしまうだけでもかなりの毒なのである。銀が毒であるというのは他の妖怪等にも言える事ではあるが、吸血鬼にとってはそれが顕著である。吸血鬼の伝承は色々な所で伝わっていて、弱点も伝えられている。一応事実と言えるだろう。

レミリアは京介の剣による突きで貫通された上に、その剣には銀の粉が仕込まれていた。故にレミリアはもう少して死んでしまう所だったが、京介が自分の血をレミリアに飲ませる事で、血中に含まれていた大量の魔力で完全回復し、さらに毒である銀を体外に吹き飛ばしてしまった。そして京介の魔力を取り込んだ事で、銀に対して耐性ができたのだ。元々京介にはあらゆる毒素を無力化する特殊な血液が流れており、さらに大量の魔力も含まれている。それがレミリアの身体によく馴染み、銀の粉を毒と認識して無効化するようになったのだ。

「本当ですかお嬢様!？」

「本当よ咲夜。つまり、私の弱点が1つ減ったという事。これほど嬉しい事はないわ。・・・まあそれでも日光と流水と木の杭には未だに弱いけどね。」

「それでも凄い事ですわお嬢様！まさか銀を無効化できるようになるなんて、普通ではあり得ない事ですよ？」

そこへ京介が口を挟んだ。

「あり得なくはないな、吸血鬼が弱点を克服するなんてのはオレの周りじゃたまに聞く話だぜ。実際日光や木の杭が効かなくなったヤツがいるからな、知り合いに。」

「・・・・・・」

レミリアと咲夜は京介の話に驚いた。つまり、吸血鬼が真の意味で剛の者になれるということを言っているのだ。弱点がない化け物など、人間の手に負えるものではない。要するにレミリアは修業次第で今以上に強くなれるという事なのである。

妖怪というのは人間の想像の産物である以上、諸説通りの強さと弱点を持っているのが定石である。が、京介の血液によってレミリアは1つの定説を破り、京介のおかげとは言え、想像の産物から突出した存在となったのだ。

とにもかくにもレミリアは上機嫌だった。

「ありがとうね、京介。死なないどころか、強くしてくれて。感謝してもしきれないわ。」

「オレは血を飲ませただけだ。肉体の変化はあくまでお前自身によるもんだろ。オレは知らん。」

「それでもよ。ホントにありがとう。」

「私からもお礼を言うわ。一時はどうなることかと思ったけど、結果的にお嬢様は弱点を1つ破ったのだから。」

「・・・・・・うっせ／＼」

ガラにもなく京介は顔を赤くしていた。普段の生活態度や行動が乱雑すぎて褒められるような事等何一つしていない。故にこういったことにはあまり慣れていないのだ。そんな京介が、実は現役大学生だというのはにはわかには信じ難い話であるが。

そんな京介でも悪い気はしないといったところか、そつぱを向きながらも若干口角が上がっている。誰でも感謝されるのは嬉しいものだろう。

「さて、戦いも楽しかったし、嬉しい出来事も起きた。今日の夜は宴にするわ！咲夜！」

「畏まりました、お嬢様。」

咲夜が一礼をして下がろうとしたその時、

ビシッ！

「・・・え？」

「あ・・・？」

「あれ？壁が・・・。」
突如壁に走ったヒビはどんどん伸びていく。

ビキッ！ビシビシ！！バキバキバキバキ・・・！！！！

「・・・まさか！？」

「これは・・・お嬢様！？」

レミリアの足下に亀裂が走った。それと同時に下からとてつもなくおぞましい妖気が立ちこめてきた。

「・・・おい、もしかしてこの真下は地下室か？オレの知る限りだと地下室には・・・。」

「・・・ええ。私の妹、フランドール・スカーレットがいるわ。その能力や狂気の危険性から外に出る事を禁じていたのだけれど・・・もしかして私達の戦いに過剰な反応を示しているのかもしれないわ。」

その時、パチュリーが突如焦り始めた。

「・・・マズいわ。」

「どうしたんですか、パチュリー様？」

「何重にも張っていた結界が破られたわ！」

「「「「「！?!?」「「「「「」

「しかも・・・ウソでしょこれ・・・魔力が・・・」

レミリア、咲夜、京介がパチュリーの元へ駆け寄る。

「魔力がどうしたの？」

「魔力が・・・」

パチュリーがその先を言おうとした瞬間、

ズッ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！

「！！！？床が・・・・！？」

部屋の床が抜け、大穴が空いた。それと同時に、

「・・・・何・・・・この魔力！？」

「オイオイ、またとんでもねえ量だぞこりゃ。」

凄まじい魔力の奔流が部屋全体を駆け巡っている。いや、正確に言えば、下から大量の魔力が噴いているのである。狂気を孕んだ強力な魔力。

「間違いなくフランだわ。あの子、やっぱり私と京介の魔力に触発されて・・・・。」

全員落ちる事はなく宙に浮き、京介はエアハイクの魔法陣を常時展開している。

「・・・・向かってきました！」

美鈴が叫ぶ。魔力の大元がこちらへ近づいてきた。穴の中心に紅い光が見える。だんだんとその光が大きくなり、

ブワッ！

「フフフ・・・」

悪魔の妹が、全員の前に姿を現した。

「フラン・・・・・・・・」

「エヘ・・・・・・・・」

レミリアが緊迫した表情でフランを見る。フランは明らかに普通の状態ではない。狂乱状態である。瞳孔が猫のように細くなり、瞳全体が真っ赤に光っている。全身から鮮やかな紅い魔力を放ち、手には黒い曲がった棒のようなものを持っている。その先端はスペードのような形をしている。恐らく武器であろう。全体から魔力の奔流が見られ、大気と反発しあってバチバチと音を立てている。

フランは、一言こう言った。

「エヘ・・・・・・・・エヘ・・・・・・・・遊ば？」

ズドンッ！！

「がはっ！？」

フランが突如姿を消した瞬間、美鈴が後方へ吹き飛んだ。そして、

ドゴオッ！！！！

「お・・・・・・・・ゴフッ・・・・・・・・」

壁に叩き付けられただけでなく、粉碎。それだけでは勢いは止まらず隣の部屋へ飛び、奥の壁に深くめり込んだ。そして美鈴に突っ込んだと思われるフランの姿はすでにそこにはなく、美鈴の腹部には先ほどフランが持っていた武器が刺さっていた。

「美鈴！？」

咲夜が美鈴を見て叫び、時止めを駆使して刹那の間に美鈴の元へ飛んだ。

「美鈴！！」

「ガフツ・・・さ、咲夜さん・・・気を付け・・・!?!」

咲夜の背後に、狂気が佇んでいた。

「咲夜・・・次は咲夜だよ? エヘヘ・・・!?!」

「・・・っ!?!」

ギリギリ時止めをして咲夜は美鈴を抱えてレミリアの元へ戻った。
・華奢な彼女が美鈴を当然のように抱えられたのはこの際置いておこう。

レミリアは突然の事に驚いたものの、すぐに持ち直してフランを睨みつけた。

「フラン・・・なんてことをしてくれるのよ。美鈴をボロボロにしたあげく、咲夜まで狙って・・・あなた、覚悟は出来てるでしょうね?」

レミリアから魔力が噴出する。あまりの魔力に空間が張りつめてギシギシと音を立てている。

「エヘヘ・・・お姉様あ・・・アソボ?」

言った瞬間フランが一瞬でレミリアの目の前に飛んできた。

ガキンッ!!

「ぐっ・・・!?!?この子・・・なんて力を・・・!?!」

即座に魔力を前回にしてレミリアはフランの爪撃を、フランの手首を掴んで止めた。しかし、それでもなおフランの手は少しずつ動き、レミリアの喉元へ近づいていく。

「ぬ・・・ぐ・・・(この子、いつもより魔力が濃くて荒々しい。

やっぱり先刻の戦闘が原因みたいね。このままじゃ・・・)くっ・・・

・あああああ!?!」

そのまま無理矢理右後方へフランを振り飛ばした。が、フランはすぐに体勢を立て直して宙で止まり、超大量の弾幕を繰り出した。

「キヤハハハハハ!?!」

スペカではない、本物の弾幕。1つ1つに魔力が凝縮されていて高速で放たれる。全員その場から散らばり、必死に避けざるを得なかった。

その中でもレミリアは特に標的にされているようで、他のものよりも何倍も弾幕が多く、集中攻撃にあっていた。あまりの量とスピードにレミリアは必死に避けるものの、何発かがレミリアの身体を擦った。

「くっ……!!」

そのせいで、背後に狂気の塊が迫っていたことに気が付けなかった。

ズブ……

「……お……グブツ……!？」

右胸からフランの右手が突き出ている。背後からフランに貫かれたのだ。

「お姉様弱……い……そんなじゃ……コロシチャウヨ？」

「フ……ラン……!!」

フランが右手を乱暴に抜き、レミリアが悶絶する。剣で貫かれたのならまだいい。鋭いから傷口がそれほど広くなく、治りも早い。痛みはかなりあるものの、レミリアにとってはまだ我慢できるレベルである。

しかし貫いたのはフランの右手。傷口の範囲が広い上、痛みは剣の2倍以上ある。流石に上手く動きがとれない。しかし、レミリアの場合、別の理由で動けないでいた。

(マズい……心臓も多少削られている……動きが取れない!!)

例えばの話だが、ボクシングでは“心臓打ち(ハートブレイクシ

ヨット)”というブローがある。このパンチは胸部、心臓のある箇所を打ち抜く事で、相手の身体を瞬間的に麻痺させる効果がある。貫通力を必要とするので中々成功させるのは至難の業だが、ヒットすれば次のブローを当てるまでは相手は全身が麻痺して動けない状態になる。実戦においてこれを上手く駆使できればかなり試合を有利に進める事が出来、勝率がぐっと上がるのである。

レミリアはまさにそんな麻痺状態にあった。しかも心臓を直に削られているのだから効果はずっと高いものになっている。

「エヘヘ・・・トドメダヨ？」

狂乱した悪魔の妹が右手に魔力を貯める。今度はただ穴を空けるだけでなく、胴体を挟み取るつもりようだ。右手を右後方に水平に構え、肘を少し曲げて指を少し曲げる。鋭い爪が鈍く光っている。

「ぐ・・・あ・・・（このままじゃ・・・殺られる!!）。」

「シンジャエ!!」

「待てやガキ。」

ズドンッ！！

側頭部に衝撃を受け、フランが吹き飛んだ。そのまま壁に突っ込み、壁は破砕。瓦礫で身体が埋もれた。周りはいつの間にか弾幕が止んでいる。

「……………京……………介……………」

「咲夜！レミリアを頼む！」

「……………わかったわ！お嬢様！！」

咲夜がすぐに反応して瞬時にレミリアを抱えて離れた。

フランを吹き飛ばしたのは京介。フランの背後にエアハイクで音も立てずに近づき、から空きの側頭部を蹴り飛ばしたのだ。

京介は怒っていた。フランが自分の家族、美鈴や咲夜、パチュリィ、小悪魔に向かって殺傷力の高い弾幕を繰り出したうえ、最愛の姉であるレミリアに対しての仕打ち。これにより京介は“昔自分にあつた出来事”が今起きた出来事と重なってしまい、思い出してしまったのだ。身内が身内に殺される恐怖、憤怒を！

「出てこいコラ。こんなんでもくたばるタマじゃねえだろ。」

京介が低い声で瓦礫の山に向かって言う。すると瓦礫が崩れ、フランが姿を現した。無傷で。

「いくら狂気にまみれてるってな、自分の姉を殺そうとするなんざ許されねえんだよ。てめえはとんでもねえ間違いを犯してんだよ。」

フランに説教をする京介だが、フランは全く聞く耳を持たないどころか、

「エヘヘヘ・・・お兄さん、遊んでくれるの？今は凄かったよ。もつと・・・もつと・・・モットアソンデ？」

狂気が増しているようであった。京介自身も説教は通じないと思っ
てはいたが、それでも少しは聞いてほしいと思っていた。しかし、
このさまである。

「テメエ・・・ちつとばかりイタイ目に合わねえとわかんねえみて
えだな。」

ヒュバツ、ブンツ、ブオンツ！　ゴオツ！！

背中の剣を握り、2、3無造作に、力強く振る。空気が振動した。
同時に紅黒い魔力を大噴出させた。熱を帯びた紅黒い魔力で大気が
揺れている。

レミリア戦のようにやったのではまず止まらないと判断した京介
は、レミリアの時より本気になることにした。暴走した愚かな娘を
確実に止めるために！

「エへへ．．．．．」

狂気の悪魔と、

「上等だテメエ．．．。」

最強の狩人の、

世にも凶悪な殺陣が始まった。

「キヤハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「Break down!!」

第10話「部屋にヤガビーの空き箱がずっと置いてある件」(後書き)

舞台裏？回目

京介「一ヶ月ぶりだな。久しぶりだな、そして悪かったな。全てはウチの駄作者の責任だ。遠慮なくパチンコ玉を投げつけてやれ！」

バチバチバチバチバチバチ！！！！

ぼろ「痛たたたっ たたたっ たたた！？！？」

京介「つーわけで解説にならない解説開始！」

ぼろ「なんだよこの仕打ち・・・まあいいや。お久しぶりです。早速ですが解説に入ります。まず、このフラン戦、1つにまとめようと最初は思ってたのですが、長いのでわける事にしました。」

京介「まだ次話造ってないのにそんなこと言っているのか？」

ぼろ「この辺はある程度プロット組んでたからな。本文はまだ書いてないけど、戦闘で埋め尽くそうと思ってる。とりあえずの問題としてはオレの表現力だな。」

京介「ファンタジー系の戦闘ってかなり難しいからな。観る側がちゃんと話を理解出来るようにものすごく分かりやすく、かつ想像しやすくしないとならないし、そもそもお前の空想なんだからマジで上手く書かなきゃ内容全く理解できないんだよな。だからホント難しい。」

ぼろ「例えばエネルギーの塊を放出する表現とか、鎧迫り合いとか、生身での空中戦だとか、東方系の作品等に至っては当然弾幕勝負とか。細かく分かりやすく表現しなきゃならない。」

京介「でもお前の表現力は本文の通りだと。プロット組んで一生懸命書いた結果がこれだよ！」

ぼろ「とりあえず次話は戦闘に始まり、戦闘に終わると思います。」

京介「お前がどう書こうと読み手が東方理解してないとわかりづらいわな。こんな文章で大丈夫か？」

ぼろ「大丈夫じゃない、問題だ。」

京介「よし、モチベはとりあえず変わってないな。最低限その調子で書け。」

ぼろ「なんだか色々おかしいが了解。暇つぶしで書いているものですが、読んでいただければ幸いです。」

京介「それでは次回またお会いしましょう。」 m () m

ぼろ「またのおこしをお待ちしております。」 m () m

京介「今回も最後は揃ったな、気持ち悪い。」
ぼろ「何で毎回揃うんだろう、最後の字数。」

第11話「観たいアニメが始まったヒヤッホオオオオオオ！」（前書き）

どうもお待たせしました。第11話投稿です。

こんな文で大丈夫だろうか。いくら書いても

駄文・・・orz

ともかくにも第11話、開幕です。

観ていただければ幸いです。

それでは、どうぞ。

第11話「観たいアニメが始まったヒヤッホオオオオオオ！」

「キヤハハハ！」

「オオオアア！」

ドズンッ！！

互いの拳が当たり、鈍い衝突音が部屋全体に響く。床が抜けているので響き方が尋常ではない。互いの右拳ははじける事なくその場に留まり、まるで鍔迫り合いのように押し合った状態になっている。

しかし急にフランが右拳を引っ込めて、左足による上段蹴りを繰り出した。恐ろしいスピードで繰り出されたそれは空気を切り裂くかのようなものである。しかし京介は目で視てそれを中途半端に引っ込めていた右腕を盾にして防いだ。当たったとたんにとんでもない衝撃が京介を吹き飛ばそうとするも、京介は全くぶれる事もなく留まっている。それどころか左手で銃をフランの眼前に構えて連射した。

ズドドドドドドドドド！！！！

一瞬で十数発放ったが、フランは銃弾が発射される直前に京介の頭上を飛ぶ事で離脱、京介の背後に回って右手で京介の心臓を貫こうと手刀を剣に見立てて突きを繰り出した。鋭い爪による突きは人間の肉体などいとも簡単に貫く。そしてフランは高位の吸血鬼。妖怪の頑強な肉体でさえも貫いてしまう。

しかし京介はそれを右に高速移動して回避。一瞬で数十メートル離れて再び銃撃を放つ。フランはそれを縦横無尽に避け、銃撃が収

まった所で放たれた方向を見る。しかしそこに京介の姿はない。

「フンッ!!」

ドゴッ!!

「ガッ!?!」

気配を感じさせずにふいに左から京介が左拳打をフランの側頭部に浴びせた。その高威力にフランは脳を揺らされて思わずグラついた。

だが流石に人間とはスペックが違う。直ぐさま体勢を立て直し、今度は縦横無尽に飛びながら京介に高速で爪による連続攻撃を繰り出した。常人では絶対に見切れない程のスピードに、しかし京介はそれを全て、最初にぶつかり合う瞬間に投げ上げた剣をタイミングよく掴み、全てガードした。ただのガードではなく、緩く構えて剣に攻撃が当たった瞬間その衝撃力を外側へ受け流した。ただガードするだけでは負担がかかって後に響くからである。

ただ、いつまでも受けに回る京介ではなかった。本来京介は攻撃重視の特攻型である。左手の銃をホルスターに仕舞い、ふいに手を前方に伸ばした。

ガシィッ!!

「あっ!?!」

攻撃直後に飛ぶフランが無防備なのを隙と見て京介は、飛び去ろうとするフランの足を掴んだのだ。この連続攻撃の飛行パターンは覚えてしまったので次は何処を飛ぶのかを想定した京介は難なくフランの足を掴む事が出来た。

だがフランも掴まれたと理解したや否や、京介の顔めがけて超至近距離の弾幕を放った。

「禁忌「フォービドゥンフルーツ!!」!!」

ズドドドドドドドドドドン！！！！

超至近距離であつたため、方向性などは関係なく京介の顔に、いや全身にヒットした。かなりの高威力な上、スぺルカードではなく殺すための攻撃である。フランは大ダメージを負わせる事が出来たと確信した。

しかし、それは並の存在であつたらの話である。

「よう。」

「っ！？」

弾幕の爆発で発生した煙の中から京介が無傷でそこにいたのだ。これにはフランも驚愕を隠せなかった。

「悪いな、予想を裏切っちまって・・・よ！！」

そう言う京介は、フランの足を掴んでいた左手により力を込めて、自分を中心に縦に振り回し、遠心力が十分ついたところで思い切り遙か下の地下室へ振り飛ばした。

ゴウッ！！

周囲の大気を巻き込んでフランは高速で落ちていった。あまりの落下スピードに翼も使えないように、そのまま地下室の床に着弾した。ズドオオオオオオオン！！！！

破碎が地下室から響き渡る。あまりの衝撃と破碎範囲により、下からレミリアの部屋の壁まで大きくヒビが入った。

「ヘッ、説教はこれからバカヤロウ！！」

京介はエアハイクの魔法陣を消して、地下室へと自ら落ちて行つた。

「お嬢様！お嬢様！！しっかりして下さい！！」

レミリアの部屋の壁の穴を抜けた隣の部屋。そこで咲夜はレミリアと美鈴を介抱していた。

「ゲホツ・・・全く、やってくれるもんね、あの子は。」

「大丈夫ですかお嬢様？」

「なんとか大丈夫よ。大分傷も塞がってきたわ。ありがとう、咲夜。」

「いえ、私は何も・・・美鈴、あなたは大丈夫？」

「大丈夫ですよ咲夜さん。傷は大体塞がりました。とりあえず戦えます。」

美鈴が腹を見せる。確かに本人の言う通り傷は塞がっている。見事な回復力である。しかし、戦うことはできるのかもしれないが、今のフランを相手にすると、困難を極めることになるのは必至であった。戦えると言った美鈴本人でさえ、少し困った顔をしているのだから。

「・・・咲夜、美鈴。私たちも早く二人の所へ行くわよ。」

「しかしお嬢様！今のフランお嬢様はかなり危険な状態です。ヘタに戦いに介入すればお嬢様でも・・・！」

レミリアの発言に咲夜は止めようとしたが、ふとレミリアは咲夜を見ると穏やかに笑ったのだ。

「私たちは家族よ？あの子のことを視なければならないの。こんな所で待っていたってあの子は話を聞いてくれないし、見向きもしてくれない。そもそも危険だからと言って地下室に閉じ込めたのが悪いのだから、私たちは見届けなければならぬわ。わかる？」

レミリアは別に戦うとは言っていない。ただ、姉として叱ってやり、姉として受けとめてあげたいのである。しかし今までやってこれなかったのが今更向きあうことも出来ず、ただただ先延ばしにしていたのだ。

しかし、今回京介が来たことでこの事態が起きた。レミリアはコレを気にフランと話をしようと、京介とフランが戦っている時に考えたのだ。

「お嬢様……。」

「私は情けない主よ、咲夜。こんなことにでもならないと行動出来ない。周りには最強種だと、夜の女王だと、色々な事を言ってるけど、実際は……凶悪な力と狂気を理由に、たった1人の妹と手を取り合うことも出来ない、貴方達と相談さえしてこなかった、弱い存在なのよ。……でも、京介は違う。さっき会ったばかりのやつだけど、アイツが凄く懸命になっているのがわかるし、あの子と戦うことが凄く危険であるのが分かっていながら戦闘に臨んでる。……だから思ったのよ。今こそ行動するべきだってね。こんな事態にでもならない限り、私は何もしようとしなかった大馬鹿者、でもそれでも……だったらいつそ大馬鹿者でもいいから、フランに……。……謝りたかった。許されなくても、たった一言……。……謝りたかったのよ！」

レミリアの、妹への心からの本音を初めて聴いて、咲夜は思った。このお方は本当はフランお嬢様を凄く大切にしたいのだと。血の繋がったたった1人の妹を、あんな所に閉じ込めた自分を責めているのだと。

（そうだ……。お嬢様はこういうお方なんだ。血も涙も無い凶悪な妖怪じゃない。私が知っているレミリアお嬢様は、凄く優しい主なんだ……。）

「よいしょ。」

グイッ！

ふいに美鈴が動きだし、涙を流すレミリアを、両脇に手を入れて無理矢理立たせた。

「美鈴？」

「お嬢様、そこまで言ったのですから、今すぐ行きましょう！お嬢様の思いは、きっと妹様に届く筈です！」

「あ……」

「そうですね、美鈴の言う通りです。……行きましょう、お嬢様。それに、私たち全員同罪です。そして私たち全員で家族です。だから私たち全員で行きましょう！」

「咲夜……」

部屋の扉がゆっくり開いてパチュリーと小悪魔が入ってきた。話は聴いていたようで、二人も覚悟の目をしていた。

「行くわよ、レミィ。あの子の狂気を止めるために。」

「そして、皆で優しく抱きしめてあげましょう！」

皆が皆それぞれの言葉をレミリアに告げた。レミリアは全員の言葉に感極まったが、すぐに立ち直った。

「行くわよ皆！フランを止めて、強く抱きしめてやるのよ！！」

地下室。至る所が砕け、もはや部屋とは言えなくなっていた。壁に掛けてあった絵画は何が描いてあったか分からない程ボロボロに破け、テーブルやイスは原型を留めぬ程にへし折れ、部屋全体がヒビだらけ、瓦礫だらけであった。そんな中、紅い2つの丸い光が狂気を浮かべながら宙を泳いでいる。

「フフ……アハハハ……！！！」

フランだ。床自体が瓦礫の山と化す程に叩き付けられたにもかかわらず、所々擦り傷や切り傷はあるものの、未だに狂気は絶えずにいた。

「……まだ止まらねえか……」

京介は未だ無傷でフランから10M離れた所で剣を肩に乗せながら

仁王立ちしている。フ란の耐久力にも驚くが、この男も半分人外なのでとんでもないものである。

「じゃあねえな・・・そろそろやるか！」

実のところ、京介は実力をまだまだ隠していた。レミリアと戦った時よりレベルを上げているとは言え、レミリアとは殆ど遊んでいたようなもので、ここまでの戦いも、怒っているとは言え微々たるものでしかなかった。しかしこれ以上やっても埒があかないと判断した京介は、圧倒的な実力差とプレッシャーをたたきつけてやろうと考えたのだ。

気合いを入れた京介は、自分の身体から先ほどとは比べ物にならない程の濃厚な大魔力を勢いよく放出した。それは、目の前のフ란を大きく超えるもので、周りの瓦礫や散乱した家具が吹き飛び、すでにボロボロになっている壁をさらに抉るような圧力を出している。

「アハツ・・・スゴイスゴイ！」

フ란はその力に興奮して喜んでいたが、京介としてはそんなフ란とじゃれあうつもりはもう無かった。

「ネエ！モットミセテ！モットミス」

フ란が言葉を言っている途中で、

グシャッ！！

京介の左拳がフ란の顔に当たり、フ란が後方へ大きく吹き飛んだ。

「ブハッ！？」

フ란は数M吹き飛びつつもなんとか踏みとどまって前方を見たが、そこに京介はいない。と、

ゴキッ！！

側頭部に衝撃。今度は横へ大きく吹き飛ぶフラン。目にも映らない程の速さで京介が右拳をフランの側頭部へ叩き込んだのだ。

今度は耐えきれずに地面を削りながら吹き飛ぶ。たった2発の拳打で顔面は既に鼻が折れて血を噴き出し、髪は乱れ、側頭部に喰らった衝撃で頭部全体から流血していた。

何が起きたのかも分からずフランは困惑していた。一瞬の間に攻撃されたのでは困惑するのも当然なのかもしれない。しかも吸血鬼である自分に捉えきれない攻撃があるとは思わなかったのだ、その困惑の大きさははかりしれないものである。

声を聴いたフランが顔を上げるとそこには瞳を紅く光らせた京介が眼前にいた。紅い魔力が身体から立ち昇り、筋肉が先ほどより隆起し、全身からフラン以上の狂気をバラまいている。

に、自分も狂気を孕んでいるというのに京介の狂気に恐怖した。

身体が震える。しかしやらなければ自分がコロサレル。コワイ、シ
ヌ、イヤダ、コワイ、コワイコワイコワイコワイコワイコワ
イコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワ
イコワイコワイ!!!!!!

狂気と恐怖がない交ぜになったフランはがむしやらに京介に攻撃を仕掛けた。その攻撃はフランの真の能力、「全てを破壊する程度の能力」だ。

フランの手に黒い“何か”が現れる。それを思い切り握りつぶした。フランが能力を発動する時、対象の脆い部分を“目”として捉え、それを移動させ自分の手の中に持つて来ることが出来る。これを握りつぶすことで対象を殺すことが出来るのだ。

似たものに“妄想心音（ザバーニーヤ）”というものがあるのをご存知だろうか。あれは自分の手の中に相手の心臓とリンクした疑似心臓を作り出すことが出来、それを握りつぶすことでリンクしている相手の心臓を潰すことが出来るのだ。

他にも”直死の魔眼“といったものもある。これは対象に、死にやすい“線”とそれが密集して特に脆くなっている“点”が見え、これを斬ったり突いたりすることで対象を完全に死に至らせることが出来る。

フランの能力はその2つのどちらにも似ているが、妄想心音と直死の魔眼はそれぞれ条件やデメリットが存在する。対してフランの能力にはそういったものが無いのでこちらの方が凶悪で恐ろしいと言える。

しかし、

「・・・アレ？・・・ア、アレ！？何デ！？何デ壊レナイノ！？」
いくら握りつぶしても京介に死の気配が訪れない。確かに京介の“目”を移動して握りつぶしている筈にも関わらず、京介にはまるで通じた様子が無い。フランの焦った顔を見て京介は言った。

「・・・悪イガ、オレニハ効力ネエヨ。」

「・・・なんて魔力なのよ・・・!!」

ちょうどこの時レミリア達が地下室に辿り着いた。攻撃の余波などを受けないようにパチュリーが全員を守る結界を施していたために多少遅くなってしまった。着いた時、レミリアは京介から迸る魔力が自分とやった時とは段違いであることに思わず絶句してしまった。他の面々も驚いていたが、パチュリーだけは京介を手元の魔導書で分析しようとしていた。この状況で流石である。

と、咲夜がフランのやつていることに気付いた。

「・・・あ、アレは!? お嬢様、あれはフランお嬢様の能力では!」

これを聞き全員フランの手元を凝視した。確かにフランは能力を発動している。証拠としてフランの手の中には黒い“目”が造られている。しかし、それを何度も造っては握りつぶす作業を必死に行っているようだった。

「・・・あれって京介を対象にしてるのよね?」

レミリアが言う。しかし京介には何の変化も見られない。

「・・・そう、ですよね? あれ? でも何で?」

「確かに妙ね。妹様の能力は全てを破壊する能力。他に壊そうとしているようでもないし・・・どう考えても京介が対象の筈なのに、どういうことかしら?」

美鈴とパチュリーも疑問を唱える。おそらく全員が思っていることであろう。しかし京介は死んでいない。これはもう、1つの答えを言うしか無かった。

「アイツ・・・フランの力が効かないの?」

「戒メダ。」

そう言うとき京介は左手を後ろへ回し、魔力を込めて力を入れた。すると京介の左腕に突如“黒い包帯”が出現し、それがハバリと地面へ落ちる。包帯がとれた左腕は、人間の腕ではなく、異形の腕だった。禍々しく、赤と黒で彩られた恐ろしい腕がそこにあった。

「テメエガ振りマイテタ狂気・・・今度ハテメエ自身ガ喰ラツテ思イ知ル番ダ！」

右手でフランを3M程上へほおる。そして落ちてきた所を異形の左を思い切り振り抜いた！

「C a t c h t h i s ! ! !」

ドオンッ！！！！！！

何かとんでもなく重いものが地面に落ちたかのような鈍い重い音が鳴った。

「ゴブツ・・・！！？」

異形の左によるストレートを腹部に喰らったフランは大量に血を吐き、とんでもないスピードで吹き飛んだ。そして壁に爆撃でも落ちたかのような衝撃音を響かせながら全身が確認出来なくなるくらい深くめり込んだ。めり込んだところを中心にクレーターのようなのがが発生した。そしてこの時の衝撃でフランの全身から血が噴き出し、フランは完全に気絶した。

「・・・ふうつ。」

禍々しく立ち昇っていた魔力がおさまり、京介は普段通りに戻った。先ほどフランに浴びせていた狂気はすっかり消えている。京介は狂気をコントロール出来るのである。

「フラン！！」

京介の横を通り過ぎてフランのもとへレミリアが駆け寄った。京介の隣に咲夜とパチュリーが歩み寄ってきた。

「・・・随分やったものね。大丈夫かしら？」

「アイツ結構強かったからな、こんくらいじゃくたばらねえし、そもそも吸血鬼だぜ？これで死んだら伝説にもならねえよ。」

パチュリーの発言に当たり前のように答える京介だが、フランはズタボロになっていて、しかも壁にめり込んだまま大出血で気絶しているのに大丈夫と言い切れるのは通常考えられない話である。相手が相手だからこそ言えることである。とは言え誰から見てもやりすぎに見える。レミリアでさえここまでやろうとは思えないだろう。

「あなたじゃなきゃここまでしなかったでしょうね。・・・で、すごく疑問に思うんだけど、何で“死んでない”のよ？」

咲夜の質問はもつともである。フランの能力が効いてないのだから。・・・まあ、それは落ち着いてからにしようぜ。オレも正直疲れだし、レミリアも話効きたいだろうし・・・なにより、まだ終わってわけじゃないんだよ。」

そう、京介はフランをボコボコにただけである。フランが意識を取り戻したら色々話さなければならぬことがあるのだ。

とりあえず、戦闘はこれで終わった。問題は残っているものの、全員疲弊していることもあり、後日にまわすことにした。

「ちょっと京介!! フランを壁から出すの手伝いなさいよ!!」
「あ、悪い。」

第11話「観たいアニメが始まったヒヤッホオオオオオオ！」（後書き）

舞台裏10回目

ぼろ「とんでもなく遅くなってしまい、申し訳ありません。リアルが忙しかったもので。」

京介「でもなあ、忙しくなる前に書けた筈だよなあ？」

ぼろ「・・・ホントに申し訳ないです。」

京介「まあ忙しくなったのは事実だし、大目に見てやる。でも次は早く書けよ？」

ぼろ「なるべくそうします。」

京介「さて、とりあえず解説だな。まずは・・・フランって脳揺さぶられてバランス崩れんのか？」

ぼろ「人間より遙かに丈夫なだけで基本構造は同じということにしています。ほら、美鈴やレミリアにもリアルインパクト効いただろ？」

京介「それもそうだな。次は・・・オレにフランの力が効かない理由は？」

ぼろ「これはまだ話せません。いずれ話すつもりですがとりあえず死への抵抗力が異常に強いとか、そんな風に考えていてくれればい

いかなとは思います。まあ、ちょっと違うんですけど。」

京介「あとは・・・出たな、オレの左腕。」

ぼろ「悪魔の腕（デビルブリンガー）だな。基本見た目はDMC4のネロのそれを黒くしたものと思ってくれればいいです。ただし、スペックは段違いですがね。」

京介「包帯は消耗品だからこの時点で腕は隠せなくなった。以降は晒しっぱなしだ。たぶん。」

ぼろ「つかよ、お前狂気コントロールって出来るんか？」

京介「出来るよ。まあ、コントロールしてる時点で厳密に言えばそれは狂気とはいえないかもな。おれとしては悪魔の力引き出して殺気込めてただけだし。」

ぼろ「じゃあ狂気じゃないじゃん。それでいいじゃん。」

京介「書いたのお前な。」

ぼろ「そうでした。さて、こんなところですかね。」

京介「何かあれば感想に頼むわ。んじゃまた次回会おうぜ。」

ぼろ「次回またお会いしましょう。それでは!!」

京介「いちいち揃うのがなんか当たり前になってきたな。」
ぼろ「もはやデフォルトゥうのがなんだか慣れてきた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8291t/>

東方狂戦録

2011年10月25日00時07分発行